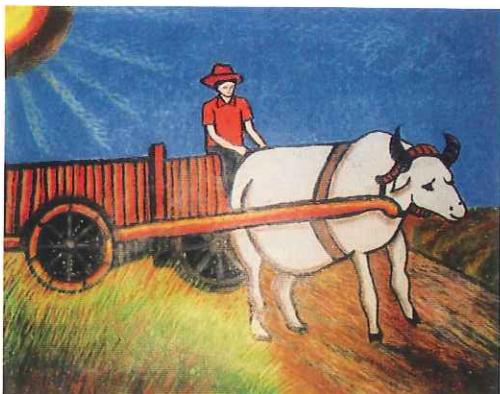
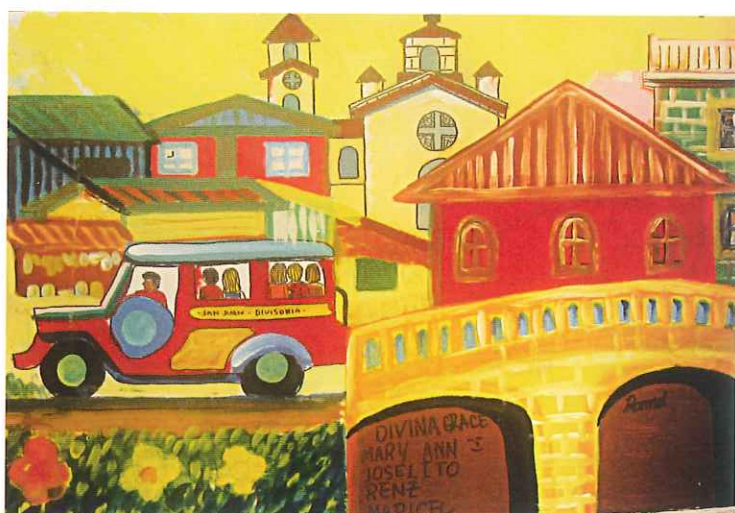
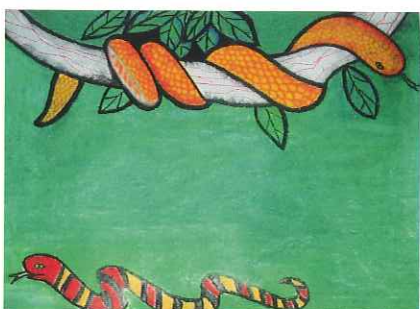
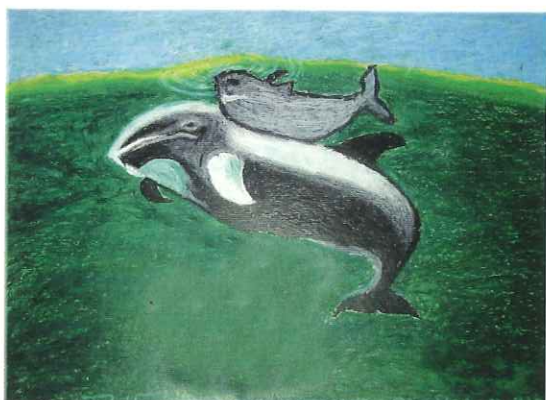




CCWA創立30周年記念誌

CCWAから ChildFund Japanへ



目次

ご挨拶

30年の歩みに感謝して	理事長 深町正信	02
30周年記念に寄せるご挨拶	チャイルド・ファンド・インターナショナル代表 ジョン・F. シュルツ博士	03

歴史

私たちの目指したもの	元部長 大谷嘉朗 元職員 大谷リツ子	04
国際精神里親運動部の30年の歩み	部長 小林毅	08
国際精神里親運動部の事務所建設を振り返って	監事 伊達忠成	10

フィリピンでの里親運動

幼き友デルフィン	里親会員 宮田光雄 宮田通子	11
遙かフィリピンの里子さんを想って	里親会員 武藤純子	12
私を育てくれたもの	元里子 マリリン・コーネリオ	13
小さなからし種が育ち	センター長 ナタニエル・B・エスパントール	14
飢える心に満ちる愛	センター長 エストレリア・S・アルコンガ	15

CCWAフィリピン人スタッフの働き

わずかな分かち合いは、世界中の必要を満たす宝を生み出す	元現地顧問 エスター・B・ガホ	16
再び変革の時を迎えるCCWAに寄せて	元フィリピン事務所所長 レイナルド・アントニオ・R・マンテ	16
恵みと祝福の中で	フィリピン事務所所長 マリア・レヒーナ・M・ムンサヤク	17
困難と喜びを越えて	フィリピン事務所職員(プログラム担当) ジョセフィン・O・メジーナ	17
変革と継承	フィリピン事務所職員(会計担当) ルセノ・B・トーレス	18

ネパール事業

ネパール山村に根付いた保健システム	UMN オカルドゥンガ地域病院ディレクター プレム・B・スバ	19
ネパールの栄養改善を担って	ディレクター ロシャニ・シュレスタ	19

資料

年表・写真で見る30年	20
数字で見る30年	26
国際精神里親運動による協力センター一覧	28
短期開発プロジェクト一覧	30
地図	31
チャイルド・ファンド・ジャパンについて／編集後記	32

30年の歩みに感謝して

深町 正信

社会福祉法人基督教児童福祉会 理事長
青山学院長



社会福祉法人基督教児童福祉会は、国際精神里親運動部を1975年4月に設置して以来、30年にわたってフィリピンを初めとする開発途上国で子どもを中心とする国際協力を実践して参りました。神様の豊かな守りと導きのもと、ご支援くださる会員の皆様のお支えにより、今日を迎えることができましたことを心より感謝申しあげます。ここに感謝の思いと共に、30周年記念誌をお届けいたします。

基督教児童福祉会は、第二次世界大戦の後、日本の子どもたちを支援した米国の民間国際協力団体であるキリスト教児童基金 (Christian Children's Fund, Inc.=CCF) の日本事務所として発足しました。CCFは、日中戦争で肉親を失った中国の子どもたちを支援しようと、1938年に、米国バージニア州で China Children's Fund (チャイナ・チルドレンズ・ファンド) として創設されました。日本が関わった戦争で被害を受けた子どもたちを支援するため発足したこの団体が、実は大戦中敵国だった日本の子どもたちをも戦後になって支援してくださいました。

その後、この団体の支援国がフィリピン共和国、大韓民国、日本へと拡大されたこと、また、中国共産党が政権を担ったことにより中国から撤退を余儀なくされたことによって、1951年、その名称がキリスト教児童基金と変更されたのです。このCCFの働きを顧みるとき、世界の変化や子どもたちの状況に伴って、支援のあり方や新しい思考を整えながら奉仕することの大切さを見ることができます。

聖書には、「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ」(マルコによる福音書第2章22節)という言葉があります。発酵が続く新酒を古く弾力性がなくなった革袋に入れると、ガスが充満して破れてしまい、酒も袋も無駄になってしまいます。新たなことがらには、時として、新しい思考や態勢を整えることが大切であると教えています。

この度、基督教児童福祉会理事会・評議員会は、新たに特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンを設立して、国際協力事業に専念する体制を整えることにいたしました。従って、国際精神里親運動部としては創設30周年をもって、その活動にひとまずピリオドを打つことになりました。

今後、社会福祉法人基督教児童福祉会は、バット博士記念ホームやマルガリータの家を通して日本の子どもたちに、また、チャイルド・ファンド・ジャパンは開発途上国で厳しい生活を強いられている子どもたちに新たな思いをもって仕えて参る所存です。

皆様には、今後とも引き続き温かなご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

30周年記念に寄せるご挨拶

ジョン・F.シュルツ博士

Dr. John F. Schultz

チャイルド・ファンド・インターナショナル代表および総裁
キリスト教児童基金 (CCF) 総裁



理事長殿、そして共に働く仲間の皆様

チャイルド・ファンド・インターナショナル (CFI) *を代表して、この大切な機会を祝う栄誉を与えられたことに、深く感謝いたします。また、基督教児童福祉会の理事の皆様、職員の皆様にも、キリスト教児童基金 (CCF) のすべての理事を代表して心からのご挨拶を申し上げます。

今般、CCWA国際精神里親運動部が、チャイルド・ファンド・ジャパンという名の下に新しい国際的な組織を設立する重要な一歩を踏み出したことは、私たち一同の喜びでもあります。CCWAは、これまで国際的な活動の場で築いた確固たる基盤に立って、新しい組織を育て、世界の舞台にその存在を知らしめるものとなるでしょう。成立して間もないCFIも、この草創期をチャイルド・ファンド・ジャパンと共に成長していきたいと思っています。

記念すべきこの時にあたり、CCWAがこれまで担ってきた大切な仕事やその歴史を振り返ってみましょう。第二次大戦後、日本を訪れたCCF総主事のヴィーラント・ミルズ博士が見たのは、生き延びることで精一杯の生活をしている多くの子どもたちや家族でした。1950年代にはモデル施設としてバット博士記念ホームなど3つの児童養護施設が作られ、その後は家庭への支援も含めた、日本全国100ヵ所近くにおよぶ養護施設やプロジェクトの支援が行われました。日本の児童福祉が進展するなかで、CCWAも大きな貢献をしてきたのです。

CCWAは比較的早い時期、1974年にCCFから独立しました。受益者から、みずから事業を実施する立場に変わったことは、新たな挑戦でした。スポンサーシップ・プログラムが、他のアジアの国々を対象に行われていくことが合意されたのもこの時でした。

その後もCCWAの支援は、韓国の身体障害者の施設、フィリピンの子どもたちへの地域ベースの支援、エチオピアのストリートチルドレン、またネパールの保健クリニックの支援へと広がって行きました。CCWAの活動の成果が次々と生み出されていくのを見て、私たちは誇りに思うとともに、深い満足を覚えました。プログラムの実施、組織の真摯な運営、支援者への説明責任などをめぐる確立されてきた事業の質の高さは、チャイルド・ファンド・ジャパンとなっても継承されるに違いありません。

終わりにあたり、CCWAが大変重要な節目を迎えたことに、あらためて心からの祝意を表します。この素晴らしい機会を共に分かち合うことができたことに感謝すると同時に、これに続く月日、そして幾年も続く協力関係を、チャイルド・ファンド・ジャパンとの間で築いて行くことを心待ちにしております。

深い感謝と神の祝福と共に

(*) 我が国の子どもたちを支援したキリスト教児童基金 (CCF) は、米国に加えて、カナダ、オーストラリア、デンマークなどに関係団体を持ち、CCFインターナショナルを結成した。2004年4月、この組織が名称を変更して、チャイルド・ファンド・インターナショナルとなった。

歴史

「私たちが目指したもの」

元国際精神里親運動部部長 大谷嘉朗

元職員 大谷リツ子

2000年3月に行われた国際精神里親運動部の職員研修での講演を、事務局で編集したものです。小見出しは編集者によるものです。

順送りの恩返し

それでは、「私たちが目指したもの」という題でお話します。1948年から26年間、およそ9万人の日本の子どもたちが、キリスト教児童基金（Christian Children's Fund : CCF）を通して、アメリカやカナダの人たちから援助を受けました。社会福祉法人基督教児童福祉会は、CCFからの支援を子どもたちに届ける事業をするために設立されたわけです。CCFの支援金は総額56億円に達したという記録があります。この金額には、学校法人クラーク学園・和泉短期大学の創設とか、児童養護施設・バット博士記念ホームの建築費も含まれていますが、多くが児童養護施設の子どもたちに向けられたものです。

1970年、日本が経済成長を遂げると、CCFは、日本への支援を漸減して、10年で援助を終結すると



いう方針を示しました。この頃には、国からの措置費や補助金が充実して、CCFの援助金は各施設の収入の2%ほどにしかありませんでした。それでも、支援を受けていた施設長の中には援助継続を希望される人もおりました。そこで、施設長によびかけて、東南アジア諸国の子どもたちの現状を視察しようという計画が持ち上がりました。1974年8月、11人で台湾、フィリピン、タイと香港へ視察訪問を行いました。この訪問を通して、参加者は、圧倒的な貧困の現実を知り、「援助は辞退すべきである」という共通認識が生まれました。その後の施設長総会で、1975年3月まで支援を受けて、それから先は支援を辞退するという決議がされました。

理事会と事務局は、その後をどうするか真剣に考えました。26年間、9万人の子どもたちが、56億円も

の支援を受けて、「どうもありがとうございました。はい、さようなら」ではいけないのではないかと考えました。そこで、受けた方にお返しするのではなく、別の方に同じようなことをする、「順送りの恩返し」をしようではないかということで合意が生まれました。「分かち合って共に生きること」こそ、26年間の善意に対する恩返しになると考えたのです。

そして、この考えを具体化するため、基督教児童福祉会は、法人内に国際精神里親運動部を創設して、日本の方々に発展途上国の子どもたちのスポンサーになってくださいとアピールを始めました。

事務局の思い

熱心な祈りと熱い思いを込めて、国際精神里親運動部は事業を開始しました。当時、事務局には5人のスタッフがいましたが、無給でスタートしました。半年、あるいは1年無給になるのか分からないけれども、とにかく私たちがやらなければいけない。26年間の善意に対してやらなければいけない。フィリピンの子どもたちの悲惨な状況に対して、日本人としてやらなければいけないという思いがありました。

そんな時、CCFのスポンサーになっておられた川崎南ロータリークラブの飯塚勲さんはじめ何人かのロータリアンの方たちが、CCFから日本の基督教児童福祉会のスポンサーに移ってくださることになりました。そうしたこともあり、74年度でCCFの支援が終結するということがはっきりした段階で、CCFのスポンサーであったロータリアンの方たちは全部日本のCCWAのほうに回ってくださいました。1975年4月、フィリピン国内三ヶ所の支援センターでサービスを受

ける67名の子どもたちに、第一回の送金をすることができました。今と違って、民間による国際協力などという考え方は一般的ではなかった時代です。小さな一歩かも知れませんが、大切な一歩を歩み出すことができました。



対等・参加・自立にむけた援助・人材育成

当時、私たちは、援助するにあたっては、援助する側とされる側に上下関係があってはいけない、対等の立場でなければその援助は意味がない。持てる者が持たない者に与えるのであってはならないと、考えました。それから、効果的に援助が生かされるためには、サービスを受ける人たちがそのプログラムに参加しなければならないとも考えました。ワーカーが決めるのではなくて、そのサービスを利用する人たちと一緒に考えなければいけないということです。参加することによって自分自身の問題を意識化し、何に自分たちが苦しんでいるのかはっきり認識することで、私たちの援助をどういうふうに活用するかということも自己決定してもらい、その結果として、自立をサポートするということです。また、援助が依存性を高めるものであってはならない。援助が依存性を高めるものならば、そんなのはやらないほうがいい、と

ということが絶えず私たちの頭の中にありました。

こうした考えを具体化するため、私たちは、支援を利用してくれる子どもたちを、貧しいなかでも収入レベルが下から30%の世帯から選んでもらうという考えを打ち出しました。こうした子どもたちにかかわることによって、その背後にある家族、そして家族のよって立つ地域に働きかけようと思いました。国際精神里親運動は、「精神里親」対「精神里子」という対一の関係が基本ですが、子どもを取り巻く家族や地域に働きかけるサービスを含めることにしました。また、最初の三ヶ所の支援センター責任者に参加してもらい、活動の目標を、「平和と、同胞愛と、人間の尊厳に値する生活の確立」と定めました。とても崇高な目標ができたのだと感動したことを今でも覚えています。

この崇高な目標の実現を目指して、子どもの教育、栄養改善、保健・衛生に焦点をあてて、支援を組み立てました。また、親に対する働きかけ、例えばどうやって子どもを育てるか。衛生や育児の問題、栄養の問題について、親の理解を増してもらうことにも取り組みました。それから、親に対しても自立のための職業訓練をする。これは、あとになってから確実にスタッフの皆さん方の努力で実行に移されたもので、生活協同組合をつくとか、生業資金の貸付制度をつくるということです。



最後に、じつはこれがいちばん大事ですが、人材育成ということです。高邁な理想や夢を実行に移せる人材を育てることが大事であるということでした。ですから、まだあまりお金もない時期に、アジア学院に勉強のために青年を呼ぶということや、日本のいろいろな財団からの補助金でセンター長たちの日本への研修旅行もしました。さらに、フィリピンで研修会もいたしました。とにかく人がいちばん大事なことです。フィリピンでの人材育成に一生懸命になったのは、自分で努力し、自分の足で立って歩く。自立、自助の努力ができる人材の育成を応援したかったわけです。いちばんいけないことは、自立の努力をしないで得られる経済援助です。これは施しですね。それは人間の尊厳を傷つけることになる。ですから、相手の人格を尊重しながら自立できるような応援のあり方を追い求め、目標として掲げたわけです。

精神里親に期待したもの

以上は、フィリピンで私たちが目指したものですけれども、日本国内で目指したこともありました。スポンサーシップには、里子と精神里親という対一のつながりがあります。しかし、精神里親の皆様には、子どもの背後には家族があるということ、里子に対する働きかけが家族全体の幸せにつながるということを理解してくださることを期待しました。貧しくても親と一緒にいることが、子ども一人ひとりに対するサポートの大事な要素であるからです。家庭が崩壊しないように、日本から祈っている、サポートしているということがその家族に伝わるのは意味のあることと思っていたわけです。

それから、里子と里親さんを通して心と心のふれ合う運動であるということ。そしてそれは「顔の見

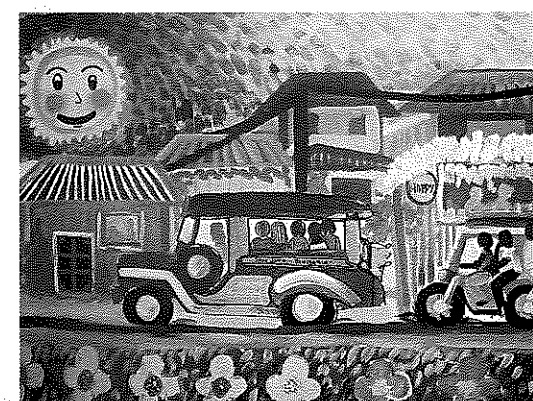
える関係」にあって、お手紙を通して心と心がふれ合う運動、これが国際精神里親運動であると私たちは思っていました。生きていく喜びを共にすると同時に、また悲しい者と共に悲しむという、「心と心のふれ合う運動」が国際精神里親運動であると考えて、そういうことをわかっていただくように努力いたしました。



逆風を越えて

東京事務局でも、こういうことを目指してやってきたのですが、目指すものがはっきりしていたから私たちは批判に耐えられたのです。1975年に運動を始めたとき、理解してくれる人は非常に少なかったですね。圧倒的な貧困に対して、そんなものをやっても無駄だとおっしゃる方々がいました。また、当時は独裁政権とも呼ばれたマルコス政権でしたから、援助することはマルコス政府に資することになるのではないかという批判も受けました。特に、最初の5年間、里親さんが500人を超すまでの間は、なりふり構わず、髪を振り乱して、という感じで募金活動にはね回っていたように思います。今はNGOがたくさん誕生して国際協力を理解される方が多くなりましたが、当時は違いました。

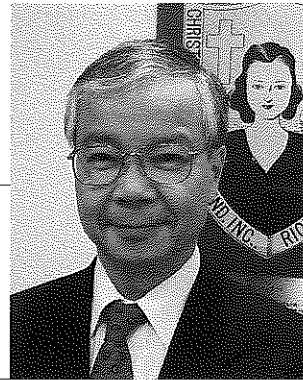
私たちはこうやって目指すものを掲げましたが、それを具体的に実行に移していったのは後に続いてくださったスタッフの皆さんの力であったことを思うと、私は本当にありがとうございますとお礼を申し上げたいと思います。今日は、ありがとうございました。



国際精神里親運動の30年を振り返る

社会福祉法人基督教児童福祉会 国際精神里親運動部

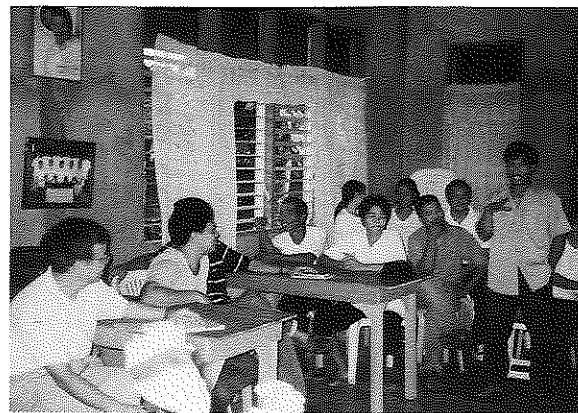
部長 小林 毅



はじめに

1975年、社会福祉法人基督教児童福祉会は、米国の民間海外協力団体であるキリスト教児童基金が日本の子どもたちを支援する方法として採用した「スポンサーシップ」を「国際精神里親運動」として導入しました。これは、「精神里親」と呼ばれる会員を募集して、里親会員の方々からのご寄付により、貧困世帯の子ども、家族、さらに地域住民の生活改善に協力するものです。この「スポンサーシップ」は、現在も国際協力の一方法として定着しています。

現在、フィリピン共和国のルソン島北部からミンダナオ島南部まで24ヶ所に支援センターがあり、約5,200人の子どもたちが「精神里子」として支援を受けています。また、「国際精神里親運動」によるこれまでの支援の結果、成長して巣立った子どもたちが12,315人を超え、支援を終結した約26ヶ所の地域の多くでは、子どもたちの親や地域の人びとが信用貸付組合や保健活動を行う住民組織を運営しながら、生活改善の努力を継続しています。



日本では、国際協力に携わる民間団体の多くが1980年代に誕生しており、それら活動の歴史は浅く、欧米の民間団体に比べ力量が不足していると言われています。では、比較的早く国際協力活動を始めたCCWAが30年にわたって実践してきた国際精神里親運動には、どのような意義があるのでしょうか。四点にしばって考察します。

生活保障としての貢献

フィリピン政府は、社会福祉を含む社会サービス関連施策に対して国家予算の30%以上を支出していますが、子どもたち、零細農民、漁民、女性、高齢者、スラム住民、少数民族といった社会的弱者の状況には厳しいものがあります。貧しい地域で実施される子どもへの教育及び保健分野での支援は、子どもたちの教育や保健サービスを受ける権利を保障していると言えます。さらに、子どもたちの親たちや地域住民に対する成人教育、職業訓練、生業資金の貸付などの支援は貧困層の生活保障という点で一定の貢献を果たしています。

社会参加の保障 ー民主主義の土壌作りー

貧しさは、社会的な構造に起因しています。村や町という地域レベル、州という地方レベル、さらに国家レベルで貧しい人々は発言の機会が少なく、その声は聞かれることが少ないと言えます。また、彼らの社会参加も限られています。こうした状況の中で、CCWAは、住民主体や住民参加を意識して活動してきました。具体的には、子どもたちの親や地域の人々の参加を通じた住民組織作りを奨励し、住民組織のメンバーを対象に

した「現状分析手法」、「中・長期計画の立て方」、「リーダーシップ」などのトレーニングの実施を支援してきました。こうした訓練を受けると、子どもたちの親や地域の人々が、地域の現状を分析し、自分たちに影響を及ぼす問題を発見し、その解決策を立案、解決策を実行するようになります。こうしたプロセスを通じた経験の蓄積により、農業協同組合や信用貸付組合、地域の保健活動を担う住民組織が力を得て、地域の自律的な生活改善努力が継続される仕組みが生まれてきます。

協働関係の構築

国際協力は、支援を「与える側」と「受ける側」という関係が固定しやすいため、対等な関係、パートナーシップの確立が重要と言われます。CCWAは、フィリピン共和国の首都マニラにフィリピン人スタッフから構成される事務所を設置して、支援を行うパートナー団体との間で対等な関係を構築することに務めてきました。さらに、住民参加を重視して「持続可能な開発」を実現するという目標に向かって、共に活動することのできるパートナー団体との協働を重視して支援活動を組み立ててきました。



国際協力への市民参加

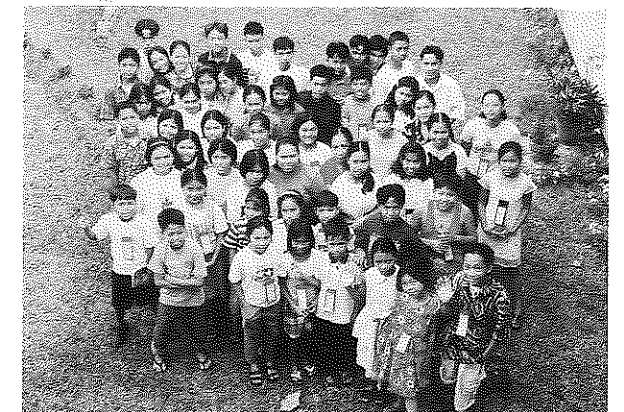
フィリピンの子ども、家族、地域住民の生活改善を

支援するため、CCWAの支援者になってくださる方々の参加動機は一つではありません。戦争中フィリピンへ赴いていたことやフィリピンで家族を亡くしたという理由、フィリピンの子どもたちの厳しい生活状況を知ったこと、フィリピンの子どもと交流したいなど、いろいろな理由があります。しかし、いずれにせよ、同じ時代を、同じ地球に住む人間同士として「共生」しているという意識により、協力してくださる方が多くおられます。国際精神里親運動は、こうした「共生」を求める市民に国際協力へ参加するという機会を提供しているといえます。



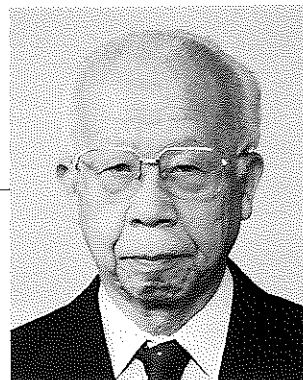
おわりに

30年にわたって継続されてきた国際精神里親運動は、子どもたちの成長に協力すると共に貧困の軽減にも貢献してきました。今後は、いろいろな課題を克服しつつ、この地球が一人でも多く子どもや大人にとって住みよい場所となるように、活動のさらなる発展に力を注いで参ります。



社会福祉法人基督教児童福祉会 (CCWA)・国際精神里親運動部の 事務所建設を振り返って

監 事
伊達 忠成



私がCCWAの監事に就任して19年になります。国際精神里親運動部は、1980年代半ばから事業規模が大きくなると共にスタッフが増員され、90年代になると善福寺の事務所が手狭になりました。さらに建物の老朽化も著しく、法人として事務所を建設する必要が明らかになりました。

しかし、事務所のある善福寺は第一種住宅専用地域のため、通常事務所建設はできません。その頃、法人本部と法人が運営するバット博士記念ホームがある町田市下小山田では、区画整理事業が進行していました。「下小山田土地区画整理組合」が発足、平本善一園長(当時)も、区画整理組合の理事に加わっていたため、ホーム隣接地を入手する案が検討されました。善福寺事務所の近くには女性スタッフの何人かが卒業した東京女子大学や広い善福寺公園があり、そこからの移転については淋しさを感じつつも、理事会は、法人本部に隣接して運動部事務所を建設することにより、法人全体の事業推進に良いと結論づけました。1992年7月、私は監事から事務所建設担当理事となり、平本園長や小林部長と一緒に作業に着手しました。

間もなく、杉並区阿佐ヶ谷駅前にあった富田設計事務所の富田千朗さんを紹介され、富田さんに善福寺事務所と本部隣接地を詳細に検分して貰いました。すると、富田さんは、都心からの距離や交通の便を考慮すると、善福寺に事務所を建設する案を助言しました。さらに、第一種住宅専用地域内での事務所建設も、審査を経て杉並区から許可を得られること

を教えてくださいました。これらの助言を検討した結果、1993年5月の理事会は、町田市へ移転は取りやめ、善福寺に事務所を建設する決定をしました。その後は、基本設計、詳細設計、建設業者の選定とスムーズに事が進み、1994年6月に着工を迎えることができました。計画通り、新しい事務所は、1995年3月に竣工し、同月25日に竣工式が執行されました。

それ以来、私は、毎年行われる運動部の事務所クリスマス会に出席するのを楽しみにしています。事務所を訪ねる度に、ここに事務所を建設して良かったと実感します。ひとつ残念な事は、貴重な助言をくださり、基督教児童福祉会という名に相応しい建物を設計して下さった富田千朗さんが2000年12月に召天されたことです。氏の冥福をお祈りしつつペンを置きます。



フィリピン での 里親運動



里親会員

宮田光雄 宮田通子

宮田光雄氏 1928年生まれ。東北大学名誉教授。政治学。ヨーロッパ思想史専攻。奥様の通子さんと共に、1975年4月の国際精神里親運動部開設当初より里親会員。現在8人目の里子を支援中。

幼き友デルフィン

旧年末に、とても悲しい出来事がありました。私たちの「精神里子」であるデルフィン・ホガートが幼い10才の生命を閉じ、天に召されたという悲報が届いたのです。彼の属していたマリー・ユージニー児童センターの所長エディスタ修道女が、彼の生涯の最後の模様を次のように伝えてくださいました。

11月1日の午後、デルフィンが病院で苦しみ、のちに美しい死を迎えました。彼は九日間ひどい痛みを苦しみ、最後の五日間は意識不明でした。

8月末、彼は通学途中に事故にあったのです。2日後には学校にきました。ところが8月24日に突然病院に運び込まれたのです。内臓出血のためでした。死の前日、彼は意識をとり戻して、あなた方からの手紙を読みました。彼はあなた方をとても愛していて、両親に言っていました。「こんどのクリスマスはぼくのいちばん幸福なクリスマスだ。ぼくのスポンサー(里親)がすばらし

い贈り物をくれるから。」

11月4日にわたしたちは彼を葬りました。あなた方からの誕生祝いで買ったシャツや上着、靴も一緒に。……

基督教児童福祉会(CCWA)の国際精神里親運動をご存知でしょうか。(中略)私たちがそのスポンサー募集の記事を読んで申し込んだのは一年前のことです。組織が発足すると共に、待望の「里子」が紹介されてきました。(中略)送られてきた写真を見ると、いたずらっ子らしく頭に大きい絆創膏を貼った丸顔の少年です。そのうちに彼から「ぼくは小学校2年生。おにごっこが大好きです」という最初の手紙がきました。幼い字で一生懸命に書かれたその手紙は、私たちを感激させ、辞書を引引き返事を書く英語での文通がはじまったのです。7月の彼の誕生日にカードと贈り物を贈ると、つづけて次のような手紙がきました。

12ページへ続く

誕生日のカードととくにプレゼントをありがとう。あなたたちのくだったお金で、ぼくは靴と長ズボンと靴下を買うつもりです。残った分は銀行に入れるつもりです。あなたたちはほんとに親切です。ぼくはあなたたちのためにお祈りをします。

P.S. ぼくは10才になりました。あなたたちの誕生日はいつですか。あなたたちに木彫りを送りたいのです。ぼくの父は木彫工です。

あなたたちの愛する子、デルフィン・ホガートより

6月のあなたの誕生日に挨拶しなかったのがとても残念です。ぼくは、あなたたちとぼくの両親を幸福にするために、一生懸命勉強します。(中略) バギオはいまとても寒いです。ぼくは、この休みを木彫と庭仕事をして過ごしました。あなたの家族のためにいつもお祈りしています。あなたたちの写真をください。

あなたの子、デルフィン・ホガートより

彼の最後の便りは、彼の死を知らせる手紙に同封されてきました。彼が楽しみにしていたクリスマスを迎えることなしに、プレゼントも写真も手にすることができないまま、生涯を終えてしまいました。しいたげられ疎

外された民として困窮の中に生まれ、幼い身に生活の厳しさを背負って生きてきた彼。悲惨の中のデルフィンの生涯と死を思い、私たちは胸つかれる悲しみを味わいました。

考えてみれば、僅か数ヶ月の交流でした。しかし彼の生命の燃えつきる最後の貴重な日々に、私たちは不思議な導きで関わる事が許されたのです。私たちの援助がいささかでも彼の助けとなり、励ましとなりえたとするならば感謝のほかありません。私たち自身も、会うことのなかった幼い彼との文通を通して、心の世界の触れ合いの豊かさと喜びを経験したのです。地上においては恵まれることの少なかったこの幼きものの魂が、いまは天上の父の懷にいだかれ、永遠の平安に入れているようにと切に祈っています。

彼に代わって、私たちには彼の弟ワニットが新しく「里子」として与えられました。満8才、デルフィンにそっくりの、利発な子どもだと紹介されています。

以上は、1976年2月5日の「みちのく通信」に載せられた記事を事務局で抜粋・編集したものです。



里親会員 武藤 純子

武藤純子氏 1975年から里親会員、現在6人目の里子を支援中。

遙かフィリピンの里子さんを想って

CCWA国際精神里親運動に、長いこと愛情溢れるお世話をなさって居られる皆様方に、心から敬意を表します。

去年(2004年)一年は、珍しく災害の多かった年で、世界中が天災に呪われ大変な年でした。フィリピンもいろいろあり、その度に里子さんたちはどうしているだろうか。台風にも地震にも恐ろしい経験もせず、幸せだった自分を考える時、皆さんのご無事を一心に祈るばかりでした。

当方は主人もすでに亡く、思う様にお世話も出来ま

せんが、心の交流だけでも出来たら…と、私の力なさを申訳なく思います。でもこうしたご縁を結ぶ事によって、お子さんが成長された時、何か思い出に残るものがあれば、嬉しい事だと思って居ります。

もうあの頃の里子さんは立派に成人なさった事と想像しています。健康で、素直で、親孝行をしているかしら…。そんな事を考えている今日このごろです。幸せな生活が、そして笑いの絶えない日々が訪れますように、微力ながらお力添えができれば私も幸せです。

30年のお祝いを申しあげ、携わって居られる皆様方の御健闘を心からお祈り申しあげます。



マリー・ユージニー・コミュニティー・センター 元里子 マリリン・コーネリオ Marilyn Cornelio

私を育ててくれたもの

私の人生で最も重要な基盤を作ってくれたのは、CCWAからの支援を受けた1980年からの日々です。フィリピンの里子の一人に私が加えてもらえたのは、本当に神様の思召しであったと思います。私の父母は野菜農家を営み、私は8人の子どもの末っ子でした。野菜を売って得られる収入では食べていくのがやっとで、大家族のわが家は何かも不足していました。

里親さんに支えられて学んだ15年の間、私は周りの人々から愛され、導かれ、書物からは得られない経験によって多くのことを学ばせてもらいました。小学校から大学卒業まで財政的支援を受け、他にも様々なお世話を受けることができたのは、本当に神様のお恵みでした。その中でも、3つのことを申し上げたいと思います。

第一は、クリスマスカード作りです。1980年の12月、はじめて里親さんへのカードを作った時、私が挨拶を書き色を塗るのを、スタッフは辛抱強く助けてくれました。私がはじめて書いたクリスマスカードは、私ののはじめての美術レッスンの作品第1号でした。

二つ目は、サマーキャンプのことです。夏の暑さの中、私たちは山道を10km歩き、イバロイ族の子どもたちのいる地域に行って胸踊る活動をしました。子どもたちに踊りを教え、歌を指導し、話しをした経験は、今でも私の仕事に役立っています。この活動は私の社交性を伸ばし、他人と交わる時に必要な能力を育ててくれました。そして、自信と責任感を持って人のために働く気持ちを育ててくれました。

三つ目は、大学で理学療法のコースを取るための奨学金を受けられたことです。このコースは5年もかか

るため、母は短期の専門学校で学べるコースへ行きなさいと言いました。スタッフのエレナさんから奨学金が出ることを聞かされた母は、思わず泣き出してしまいました。このことで私は、何としても大学を終えようという気持ちが強まり、無事卒業を迎えたのです。

恵まれない子どもたちを学校へやろうというCCWAや里親さんの愛情に満ちた心があって、私と両親の夢はかないました。私は現在、理学療法士の国家試験に受かり、保健経営の修士号も取りました。ロルマ大学、理学療法学部の臨床指導員となって、保健経営コースの講師も務めています。これは私の力だけでなれたものではありません。CCWAと里親さんのご支援の賜物です。フィリピンの里子たちの幸せの陰には、多くの里親さんたちの私心のない犠牲があったものと思います。このような経験を得る特権を与えてくださったこと、CCWAの家族の一員としていただいたことに、心から感謝申し上げます。

なお、今に至るまで直接お会いしてお礼を申し上げる機会を得られなかった私の里親の藤田様。このご挨拶が藤田様にも届き、そのご厚情に報いるものとなればとても幸いに存じます。



インマヌエル・ルーラル・デベロップメント・センター センター長 ナタニエル・B・エスパンタール

Nathaniel B.
Espantar

1984年に、バナイ島、イロイロ州、ハニワイに開設されたハニワイ・カルバリオ・コミュニティ・センターのセンター長を務める。現在、1998年からハニワイの隣町カバトゥアンで活動するインマヌエル・ルーラル・デベロップメント・センターのセンター長。

小さなからし種が育ち

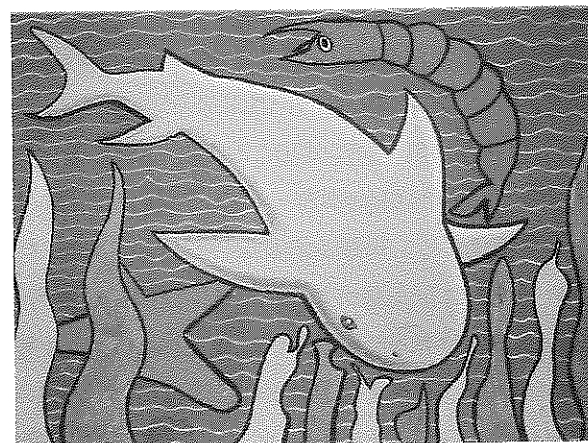
フィリピンのCCWA協力センターのセンター長と里子の家族を代表して、30周年記念のお祝いと心からのご挨拶をさせていただく機会を与えられたことを、大変光栄に存じます。フィリピンにおいて、恵まれない人々の生活を改善しようとするCCWAの努力と私たちとの協力関係に対し、全能の神が恵みを与え続けてくださることを祈ります。

私の深い賞賛と感謝の念を表すには、どんな言葉も十分ではありません。素晴らしいビジョンを掲げて草創期を作られた人々、これを真摯に実施してきた指導者と職員の皆さん、親切で寛容な支援を続けてくださった里親の皆さん。これらの人々の犠牲的努力によってCCWAの事業はフィリピン中に広がり、大きく育っていきました。何千人と言う貧しい子どもたちや家族が支援され、教育を受け、生計をたて、災害時に救援を受け、様々な技能研修を与えられ、そして隣人と協力して生きる生き方を教えられました。それはCCWAがこれらの人々を心にかけてくださったからこそできたことなのです。

最も貧しい人々のために効果的、効率的に働いて行こうとするCCWAの将来はもっと明るく輝き続けると信じています。なぜなら、それは神に愛された人々に導かれた組織だからです。CCWAが時代の挑戦を乗り越え、知恵と力に満ちてそのビジョン(理念)、ミッション(使命)、目標を満たしていけるように、この組織とそこに働く人々を、神がこれからも導き祝福することを祈ります。30年前にフィリピンに蒔かれた小さな種から育ったこの木が、恵まれない人々に命と希望と慰めをもたらし続けますように。

過去30年にCCWAがフィリピンで成し遂げたこと、今あるCCWAとなったことに、神にその栄光をたたえます。もっと力を!! 30周年記念に神の祝福を!!

Mabuhay!! (おめでとうございます)



ブカス・バラッド・コミュニティー・センター センター長 エストレリア・S・アルコンガ

Estrella S.
Alkonga

カトリック・アラミノス教区の職員として、1989年以来、CCWA協力センターである、ブカス・バラッド・コミュニティー・センターのセンター長を務めている。

飢える心に満ちる愛 -30周年記念に寄せて-

CCWA国際精神里親運動部の30周年記念にあたり、ご挨拶を申し上げます。30年の歴史の半分をCCWAと共に働くことができたことを光栄に思います。1989年7月に私たちが国際精神里親運動に参加できたことは、被造物全ての連帯と信仰のために神が備えた計画の一部であったと言えるでしょう。私たちの兄弟・姉妹の関係こそ、神の愛の本質なのです。

神の計画とは、男も女も、大人も子どもも、全ての人が豊かさや平和と喜びを経験することです。しかし、これが実現されていないのは、数百、数千の子ども、家族、地域社会が、物質的な欠乏の中にあって不安な未来を思いながら生活せざるを得ないことからみても明らかです。それでも神様は里親の皆さんに呼びかけ、皆さんはその呼びかけに応じてくださいました。皆さんの私心の無い愛の行為によって、何千という子どもたち、家族、地域社会が神様の愛を信じるに至りました。皆さんは子どもたちに物的な支援を差し伸べてくださっただけでなく、暖かな心で皆さんの愛と関心を示し、あなた自身を、そしてあなたの夢と希望を里子たちやその家族と分かち合ってくださいました。これは、パンと魚を割いて多くの空腹の人々を満たしたキリストの愛の行為にも等しいことです。当時キリストが癒した飢えとは、食べ物についての飢えだけでなく、人々の中の愛と思いやりを求める飢えであり、それは今日多くの人が抱える飢えでもあります。それはまた世界中の平和と連帯を求める飢えでもあります。2000年前に起きたこの奇跡の話は、今この現在も、皆さんのように愛の奇跡を現実に変えてくださる人々がいる限り、起き続けていると言えます。皆様が続けてくださっているご支援こそ、イエス様が行った仕事なのです。

皆様からのご支援は、数えきれない子どもや家族のために、食べ物や家の修理、教育、医療、生業活動支援に活かされています。子どもたちの人格や価値観を育てる教育や研修、親や子どもの信仰を深め、生活改善のために必要な技術を取得するセミナーなどの形で提供されます。これらの支援や活動により、地域社会に責任感あふれる親やリーダーが育ち、自分たちで行う生活改善活動や自己啓発活動を計画、実行し、評価して運営していく力を付けることができました。とりわけ、彼らが自分自身の中に秘めた能力に気づき、自らの生活を改善し、地域の仲間のためにこれを活かす姿勢を学ぶようになりました。

国際精神里親運動は、具体的な行動を通して、皆さんの子どもたちと私たちの子どもたち、皆さんの家族と私たちの家族、皆さんの社会と私たちの社会の間に連帯を築いてくれます。経済的、政治的、文化的なギャップを埋め、私たちと皆さんの間に効果的に相互理解を育んでくれます。それはまた、調和のとれた世界について、私たちが持つ共通の夢や希望を実現する道筋を提供し、今日の世界に住む人々、これからの世代の人々のためにより良い世界を創っていかうとする私たちの責任を分かち合う道を備えるものです。

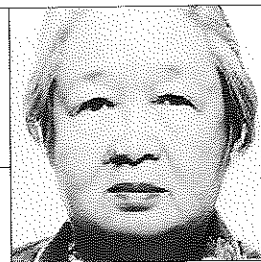
私たちは、皆様の親切、友情に感謝すると共に、この運動がもっとも多くの子どもたちや家族にパンを与え続けることが出来るように祈ります。人種、宗教、信条に関わりなく、この運動が神様の大きな愛の証であり続けることを祈ります。

神様の祝福が、私たち全ての上にありますように。

心からの敬意をこめて。

元現地顧問
エスター・B・ガホ

Ester・B・Gajo CCWAがフィリピンで活動を開始した1975年から12年間にわたり、現地でCCWAの顧問として事業の発掘や運営のために活躍された。



わずかな分かち合いは、世界中の必要を満たす宝を生み出す

1973年、韓国、ソウルで開かれたCCF(キリスト教児童基金)のアジア地域の職員が集まった会議で、一つのアイデアが生まれました。日本でのCCF事業の終結を控えていた東京のCCF職員に、アジア各国のCCF職員たちは、アメリカの役割を踏襲し、日本の外でプログラムを実施することを勧めたのです。

1975年、小さな支援からその事業を始めたCCWAは、今日、数千人の里親会員に支えられ、何千という支援を必要とする子どもたちに支援を提供するようになりました。この子どもたちは、将来の平和と兄弟愛の絆を確かなものにしてくれるでしょう。CCWAのプログラムは兄弟愛と文化的な理解を深め、与えるものと受けるものの間に平和と喜びと善意を育む基礎を提供

するものとなりました。

おやつを食べるのを我慢してくれた幼稚園、小学校、ハイスクールの生徒さんたち。祈りによって里親さんを支え、善意を持って他の人々の命への配慮を育んでくださった教会の皆様。CCWAの名を広める為に力を貸し、日本の隅々へこの働きを知らせてくださったメディアの方々。そして災害の被災者や貧しい家族の必要を満たそうという考えを広めてくださった多くの里親の皆様。皆様方の努力に心からお祝い申し上げます。

CCWAを担ってきた理事の皆様、職員、ボランティアの皆様。皆様の働きに敬意を表します。これからもこの活動の炎を燃やしつつけてください。

チャイルド・ファンド・ジャパンに万歳!!

元CCWAフィリピン事務所所長
レイナルド・アントニオ・R・マンテ

Reynaldo Antonio R. Mante マニラ事務所(現フィリピン事務所)開設に向けて、1986年に最初のフィリピン人常勤スタッフとして雇用された。1989年から1995年まで事務所長として、事務所や事業の運営体制の整備に力を尽くされた。



再び変革の時を迎えるCCWAに寄せて

基督教児童福祉会国際精神里親運動部の30周年にあたり、会員の皆様、職員・理事会の皆様にお祝いを申し上げます。お祝いの気持ちと同時に、皆様がフィリピンの子どもたち、家族、そして地域社会の人々に差し伸べてくださったご支援に、心からの感謝を申し上げます。

私は、かつて国際精神里親運動の一翼を担うことが出来たことを、大変嬉しく、また誇りに思っています。私がこの運動に参加したのは、フィリピンですでにその活動が根付いていた1986年のことで、そのころには既に新たな段階の模索が始まっていた。当時

はまた、フィリピンが新しい経済的、政治的な歩みを始めようとしている時でした。ですから、この時にフィリピン事務所を開設したのは、誠に時節に合ったことでした。それまではフィリピン人現地顧問一名がCCWAを手助けする体制でしたが、このときから複数のフィリピン人職員が運営を組織的に取りまとめていくことになったのです。

この度、国際精神里親運動は新しい名称で新しい組織として生まれ変わるという大きな変化に直面していると聞いております。この運動は、その使命を担いつつ新しい時代の中へ雄々しく船出していくことでしょう。皆様の発展と幸運をお祈りいたします。

CCWAフィリピン事務所所長
マリア・レヒーナ・M・ムンサヤク

Maria Regina M. Munsayak 1958年、マニラ生まれ。アサンブション大卒。行動科学専攻。アジア経営大学院卒。開発経営学専攻。マカティ市のアサンブション小学校校長、フィリピン社会事業協会(PBSP)研修担当ディレクターを経て、1997年からCCWAフィリピン事務所所長。



恵みと祝福の中で

過去30年間、CCWAはフィリピンの子どもたち、家族、地域社会の生活改善のために働いてきました。日本の里親の皆様からのご支援とフィリピンのCCWA協力団体による努力で、何千人と言う子どもたちが教育を与えられ、健康改善が進みました。また子どもや家族が、自力でより良い未来を切り開いて行けるように、様々な能力開発も行われてきました。里子たちが結んだ里親の皆様との絆も、彼らがより良い生活を目指して努力を続けるうえで、大きな励みとなりました。

フィリピンでの仕事をする中で、CCWAは多くの経験を学び蓄えて、成長してきました。福祉サービスを提供することから始まったCCWAの活動は、地域のニーズに応え、より包括的なプログラムになり、参加型で、地域の開発を目指すアプローチもとるようになりました。子どもや家族へのプログラムやサービスを提供する方法も、効果的で効率的なやり方で実施できるNGOに変わってきたといえます。しかし、そのような変化の中でも、変

わらず私たちの関心の中心となってきたことは、子どもたちの今の生活と将来の生活を改善することへのこだわりです。

多くの里子たちの心に植えられた希望の種は、今や花を開きつつあります。それは、神様の善性を反映するものであり、神様が私たちに変わらず注いでくださる祝福でもあります。その祝福は、里親の皆様の変わらぬご支援や、CCWAの理事会や東京事務所から寄せられる私たちフィリピン人スタッフへの支援の中にも表わされています。

CCWAフィリピン事務所のスタッフ一同を代表して、里親の皆様、CCWA理事会や東京事務所の皆さん、そしてフィリピンの協力団体の人々に対し、多くのフィリピンの子どもの夢を可能にしてくださったことに、心からの感謝とお祝いの気持ちを述べたいと思います。今後も、皆様が私たちと共に、この道のりを進んでいってくださることを祈ります。

私たちの努力の上に神様の御恵みがありますように。

CCWAフィリピン事務所職員(プログラム担当)
ジョセフィン・O・メジーナ

Josephine O. Mesina 1957年、バギオ市生まれ。セント・ルイス大卒。社会福祉専攻。ソーシャルワーカー資格取得後、1982年からCCWA協力センターであるマリ・ユージニー・コミュニティー・センターでコミュニティー・ワーカーとして勤務。1991年よりCCWAフィリピン事務所勤務。



困難と喜びを越えて

CCWAの30周年を心よりお祝い申し上げます。これまでもCCWAには多くの変化がありましたが、私自身の体験を述べたいと思います。

昨年のクリスマス、私は、以前センターで私が世話をしていた里子たち6人と再会しました。そのうちの3人は自分たちが昔CCWAに支援されていたころ通っていたセント・マーティン・スクールの先生になっていま

した。一人は大学の学部長代理でした。市の交通局の職員が一人、そして最後は看護師の指導員でした。彼らは一様に、「CCWAの支援が、教育を終え、自分の兄弟姉妹たちの教育を助け、自分たちの家族を持つという夢を実現してくれた」と語りました。「里親の皆さんから受けた愛と思いやりを自分も他の人に与えたい」という熱い思いも語ってくれました。

今年、2005年に彼らは、自分たちが受けた大きな

祝福を他の恵まれない子どもたちと分かち合おうと計画しています。子どもたちを支援する自前の里親運動を始めたいと考えているのです。この計画を担うのは、自分の生活を改善するというチャレンジをCCWAに与えられ、見事に社会に役立つ人材に成長した(昔の)里子たちであることを思うと、この計画は誠にCCWAの30周年を祝う上で、時節を得たものと思います。

私がフィリピン事務所で働き始めてからも、CCWAは仕事のシステム、原則、手続きなどを整備し、データバンクを作って仕事を効率的に進めていきました。また協力センターのスタッフへの研修を強化して、里子や

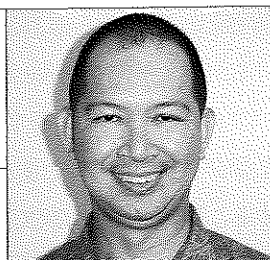
その家族の生活改善をもっと効果的に行えるように努力してきました。困難も喜びもありましたが、この30年は私にとってとても大切な年月でした。

日本の里親の皆様が、フィリピンの子どもたちや私たちに与え、また示してくださった、財政的支援、信頼に対して心より感謝いたします。皆様のご支援をいただくことで、私たちはさらに困難な生活にある子どもたちへの支援を続けていきたいと思ひます。

神様の大きな祝福とお導きが、皆様の上に豊かにありますように。

CCWAフィリピン事務所職員(会計担当) ルセノ・B・トーレス

Luceno B. Torres, JR 1960年、コタバト市生まれ。アテネオ・デ・サンボアンガ大卒。会計学専攻。1981年、公認会計士の資格を取得。2005年3月デ・ラサール大学、大学院で経営学修士課程修了予定。1989年からCCWAフィリピン事務所勤務。会計担当。



変革と継承

里親の皆様、CCWAの皆様、30周年を記念して心からのご挨拶を申し上げることを大変光栄に存じます。

CCWAはチャイルド・ファンド・ジャパンという新しい組織に生まれ変わるとのことですが、これまでのミッションが継続され、新しい組織がさらなる挑戦と機会にめぐり合えるよう期待しています。「変化は、組織が前進するために欠かせないものである」と言う言葉を、私は信じます。

まだマニラ・フィールド・オフィスと呼ばれていたCCWA事務所に招かれたのは、1989年8月でした。CCWAで働く前は企業にいたので、初めは仕事のやり方や自分の生活スタイルの変化に戸惑いましたが、CCWAがどんな組織か分かって来ると、仕事に打ち込むことができるようになりました。このご挨拶を書き

ながら感じるのは、過去15年の自分の仕事には一つの後悔も無いということです。これまでの月日を思い返す時、自分にこの誇り高い仕事が与えられたのは、神様の祝福であり恵みだと感じています。

組織の名前は変わっても、その文化、価値観、信念は新しい組織に継承され、私たちや里子たち、その家族の心に残っていくでしょう。CCWAの30周年を記念するにあたり、フィリピン事務所の同僚たち、リナ、ジョイ、ジョシー、ウェン、ピオ、ジュン、レブ、キャシー、ジョナと共に、私たちが受けてきたすべての恵みを、心の中に留めたいと思ひます。

ネパール山村に根付いた保健システム

CCWAの30周年に当たり、過去11年間のCCWAとの協力関係について述べる機会を得られたことを、大変嬉しく存じます。

ネパール東部のオカルドゥンガ郡にあるネパール合同ミッション(UMN)のオカルドゥンガ地域病院では、病院を核に包括的な地域保健サービスを提供してきました。1996年に開始されたこの事業は、村落薬局、母子保健クリニック、5歳未満児と妊婦への予防接種、栄養改善、環境衛生改善、女性グループの組織化と強化、識字教育、などの活動が10カ村で行われました。



UMN
オカルドゥンガ地域病院
ディレクター
プレム・B・スバ
Prem B. Subba (Limbu), MPH

支援を受けた村では、新生児や妊婦の死亡率、罹患率が減り、感染症や子どもの死亡も減りました。多くの栄養不良の子どもも状況が改善され、学校へ行けるようになりました。この活動は、ネパール全体の保健サービスシステムのモデルにもなると思ひます。4つの村で自分たちで活動を運営できるようになったことは、私たちが「魚の取り方」でなく「魚の育て方」を教えることができたからだと思ひます。

私にとってもネパールの人々にとっても、CCWAは単なる助成金団体ではなく、女性や子どものために働く熱意を生み出す源泉でもありました。政治的な混乱に直面している今のネパールでは、CCWAからの支援はなおさら貴重なものです。

終りに、オカルドゥンガ地域病院、UMN、オカルドゥンガの住民を代表して、CCWAの30周年のお祝いと人道的な支援への感謝を申し上げます。CCWAの会員の皆様、役員、職員の皆様に神様の大きな祝福がありますように。

ネパールの栄養改善を担って

ネパール栄養改善プロジェクト(NPCS)を代表して、CCWAが果たしてきた過去30年の業績と貢献を祝福したいと思います。CCWAが働いてきた多くの国々と同様に、私たちの国、ネパールでの活動についても心から感謝いたします。

CCWAとNPCSの協力は、2000年7月に始まりました。ネパール中の地域社会で、栄養改善を進めることを目指すこの事業は、人々が栄養改善を進めるために前向きで良い習慣を身に付けることを求めています。私たちの活動の主な受益者は、5歳未満の子どもと出産年齢期にある女性たちです。現在、ネパールの3つの郡(District)で地域の栄養改善事業と協力して活動しています。地域の保健ワーカーの研修も、私たちの大切な役目です。話し合いを多用して人々の文化的背景に合った研修スタイルをとることで、地元にある食べ物の利用を促進し、栄養問題に対処しています。



ネパール栄養改善プロジェクト
ディレクター
ロシャニ・シュレスタ
Roshani Shrestha

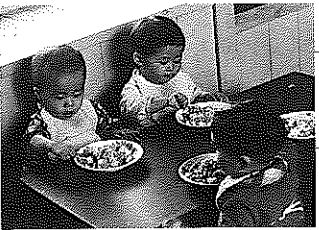
これら活動の全ての分野で、CCWAは資金的支援を提供してくれるだけでなく、事業の現場を訪問して強い関心を示してくれました。助成団体として、CCWAは私たち組織の長期的な存続に向けても、強力に支援し励ましてくれています。

チャイルド・ファンド・ジャパンの設立によって、未来に向けたCCWAのビジョンが達成され、最も支援を必要とする人々に実り多き成果を届けるものになることを祈ります。皆様と共に私たちも、私たちの地域の子どもや女性の栄養改善が進むことを目指して活動していきます。

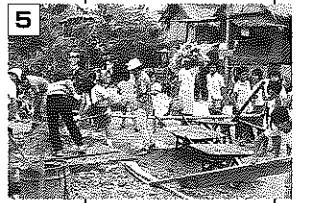
30周年に当たり、心からのお祝いを申し上げます。

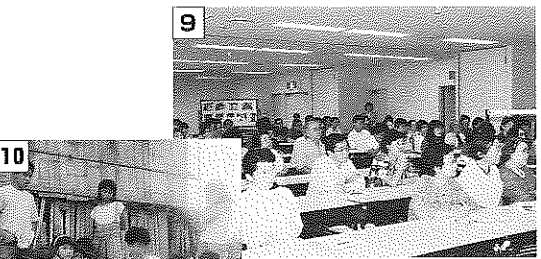
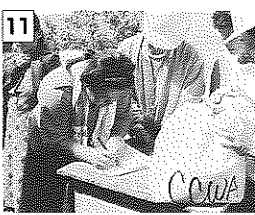
社会福祉法人 基督教児童福祉会・国際精神里親運動部年表

: 重要なことから

	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
1946年 6月 (昭和21年)	ラフ物資援助開始		
1951年 2月	この時期、CCFの援助金により19施設、1332名を支援中 CCF総主事ミルズ博士の来日。銀座教会のNCC社会部委員会の 席で日本での救護事業開始についての企画を行う		7月 フィリピン共和 国成立
1952年	新年度より800名の増員。26施設、1700名となる		
5月	クラーク博士の来日		
6月	西荻窪に職員住宅用の土地80坪購入(後の国際精神里親運動部事務所)		
9月	9月29日付けで社会福祉法人認可		
1956年			5月 日比賠償協定調印
1957年 4月	バット博士記念ホーム開所式		
1964年			10月 東京オリンピック
1965年 1月	玉川保育専門学校が和泉短期大学として文部省より認可される		マルコス大統領就任
1968年 7月	真鍋理事長辞任。岸千年、新理事長就任		
1970年	この年、CCFは93施設、5595名を支援 CCF、日本への支援漸減の方針を決定 向こう7年間の支援終結に合意		3月 大阪万国博覧会
1972年			2月 札幌オリンピック開催 9月 マルコス大統領 戒厳令発布
1973年 2月	施設長総会が、1975年度末での支援終結を決議		日比友好通商航海条約 批准。第1次石油危機
1974年 2月	施設長総会が、1974年度末での支援終結を決議		
12月	CCFの日本での活動終結		
1975年 1月	国際精神里親運動部の事務局開設準備		
4月		バギオのセンターへ最初の里子67名分の援助 金を送金	
6月	朝日新聞でCCWAが紹介され、一般からの里親申し込みがあった 会報「CCWAだより」第1号発行	ボトランのセンターへ里子41名分の援助金を送金 セブのセンターへ里子32名分の援助金を送金	
10月	第1回「CCWAの集い」開催(ルーテル・市谷センター)		
1976年 3月		韓国CCF事務所の案内で韓国の児童養護施設 を訪問。7施設に緊急援助金を送った(三菱財 団資金助成)	
7月	バギオとボトランのセンター長、および現地顧問のガホ氏来日 東京、大阪、京都で会員の集いを行う		
1977年 2月		フィリピン訪問旅行で、セブ、ボトラン、バギオ のセンターを訪問。近代映画協会の千葉茂 樹氏、CCWA記録映画作成のため同行	
7月	CCWAの集い開催。記録映画「子どもたちわがらの希望」を上映	ボトランで第1回ワークキャンプ実施。15名参加	
1978年 2月			第2次石油危機
10月	ボトランのセンター長、シスター・フェとその協力者MS.アチャコー ン来日。関東地方で集会実施。駐日比大使バルデス氏が出席	フィリピン訪問旅行で、セブ、ボトラン、バギオのセ ンターを訪問/ボトランで第2回ワークキャンプ実 施。15名参加/ボトランで地域住民生活実態調査 を明治学院大学教授・浜野一郎氏の指導で実施。 報告書作成(社会福祉事業研究開発基金助成)	
1978年 2月		バギオで第3回ワークキャンプ実施	
10月	フィリピンの児童福祉関係者女性10人(CCWAセンター長3名を 含む)が資生堂福祉事業団の研修に来日。仙台、東京、京都、大阪、 神奈川でCCWAの集いに出席		
1980年 1月			
11月	韓国・恵里口話学校校長・俞玉珠氏来日。日本聾話学校で研修 東京、神奈川、熊本でCCWAの集いに出席		
1981年 2月		セブ、イロイロのセンターへ訪問旅行実施	1月 マルコス大統領、 戒厳令を解除
4月	CCWA研修生のF・バギン氏バギオより来 日。アジア学院の農村指導者養成研修に参加		
9月	CCWAの集い開催		
12月	芳村真理さん(里親)司会の番組、東京 放送「クローズアップ日本」やサンケイ 新聞に紹介記事。会員急増		
1982年 2月		センター長、会計責任者のためのセミナーをタ ガイタイ市で開催。6センター参加	
4月	大阪でCCWAの集い開催(博愛社)		

	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
7月	里親会員、三宅恵子著「足ながおばさん空をとぶ」が主婦の友社より 刊行される	バタアン州、インドシナ難民センターで幼児保育、 給食事業開始(社協・国際児童年記念基金助成)	
9月	関東、関西、九州でCCWAの集い開催。現地顧問ガホ氏、愛徳姉妹 会シスター・リリオ来日		
1983年 2月		バギオ、セブ、タガイタイ、トンドのセンターへ訪 問旅行実施 イロイロで第4回ワークキャンプ実施	8月21日 ニノイ・ア キノ、マニラ国際空港 で暗殺される
8月			
9月	セブとタナワンのセンター長と現地顧問ガホ氏来日。東京、大阪、 福山でCCWAの集い開催		
10月	韓国訪問旅行実施。釜山市の恵里口話学校、ソウル市の橋南所望 の家など訪問		
12月	ボトランの海で召天された藤崎るつ記さんを記念する奨学金基金 が設立され、CCWAに奨学生の選考を委託される		
1984年 1月		イロイロで第5回ワークキャンプ実施	
2月		セブ、タナワン、ソルソゴンのセンターへ訪問旅 行実施	
9月	東京でCCWAの集い開催(ルーテル・市谷センター) 事務局にコンピューター導入	第1回るつ記奨学生にナガ・センターのジュリエッ ト・トンバド	
10月	仙台でCCWAの集い開催(県民会館)		
11月	名古屋でCCWAの集い開催(名古屋YWCA)		
1985年 1月		レイテ島、タクロバン市においてセンター長会議 開催	
2月	コンピューターによる領収書の発行はじまる	イロイロ、タガイタイ、ソルソゴンの センターへ訪問旅行実施	
3月	アサンブション修道会運営の技術高校から教員のエリヒオ・サント ス氏来日。吉川工業所などで電気技術研修を受ける	イロイロで第6回ワークキャンプ実施	
4月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
5月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
6月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
7月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
8月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
9月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
10月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
11月	ボトラン・センターの元里子ルイス・アルエサ来日。アジア学院で 1年間の研修に参加		
1986年 1月		ボトラン・センターの10周年記念行事に会員、 事務局職員参加	
2月			
4月	バギオ・センターのソーシャルワーカー、エリータが全国社会福祉協 議会国際児童年記念基金研修生として来日。1年間の研修を受ける 東京・西荻地域区民センターでフィリピン政変の報告会		
6月	NHK「話題の指定席」で「飢えのネグロス島を救おう」と題して小 林職員が談話放送		
8月			
9月	東京・中野サンプラザでCCWAの集い開催。センター長のシスター・ ジェネビーブ(トンド・センター)、シスター・ジョセフィン、現地顧問 ガホ氏が来日。参加者約100名。広島、福山、大阪、神奈川でも CCWAの集い開催		
10月	淡路島、松山でCCWAの集い開催		
12月	NHK番組で青木職員がCCWAを紹介	JANIC主催「NGO若手リーダー研修」に小林職員参加。	
1987年 1月		ナガ市でセンター長会議	2月 フィリピン新憲 法発布
2月		セブで第8回ワークキャンプ実施	



	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
	3月 「NGOフォーラム」開催。東京、マニラ事務所職員出席 会費の郵便局自動引き落とし始まる 5月 名古屋でCCWAの集い開催 9月 東京・渋谷「子どもの城」でCCWAの集い開催。センター長のシスター・マリア・チ(ナガ)、センター職員、ミス・クリスティー・デ・ロス・レイエス(バレール)来日。福山、三原、神戸、大阪、松本でもCCWAの集い開催 11月 里親会員、三宅恵子著「イロイロの海」がキリスト教新聞社より刊行される [6]	マニラ事務所の開設を理事会で承認  6	
1988年	1月 2月 3月 東海テレビ「土曜サロン」で里親の芳村真理さんがCCWAを紹介 諒早でCCWAの集い開催 鈴木浩、高橋馨、木下健、小林毅共著「ありがとうフィリピン」が女子パウロ会より刊行される [7] 5月 東京都社会福祉センターでCCWAの集い開催。パウリータ医師と阿部職員による報告会開催 部長の大谷嘉朗、厚生省より「第1回国際厚生事業功労者」として表彰される 9月 韓国、「橋南所望の家」より趙明珍氏来日し、CCWAへ感謝状を授与 東京「子どもの城」でCCWAの集い開催。シスター・ノルマ(カガヤンデオロ)来日。静岡、熊本、長崎でCCWAの集い開催 [8] 10月 JANIC主催のバングラデッシュ洪水救援募金に賛同。会員へ呼びかけ/年次報告書(1987年)を初めて発行 11月 会報「CCWA」の子ども版を初めて発行 トンド・センターのソーシャルワーカー、ステラ・トリオ、全国社会福祉協議会国際児童基金研修生として来日。1年間の研修を受ける 12月 JANIC主催の「NGO若手リーダー研修」に阿部職員参加	タガイタイでセンター長会議 ボトラン、トンド、モロンのセンターへ訪問旅行実施 セブで第9回ワークキャンプ実施  7  8 6月 包括的農地改革法成立	
1989年 (平成元年)	1月 カガヤンデオロ・センターの里子の絵と日本の子どもの絵で、長崎のデパートで交歓会開催 3月 大谷嘉朗部長、定年退職 4月 小林毅、部長に就任 5月 会報「CCWA」を第48号より「Hello:ハロー」と改名 6月 岸千年理事長逝去 7月 8月 東京「子どもの城」でCCWAの集い開催 盛岡、仙台、札幌、函館でCCWAの集い開催 [9] 10月 11月  9  10	マニラでセンター長会議開催 レイナルド・マンテ、フィリピン事務所所長に就任 曹洞宗ボランティア会とのタイ国での合同研修に高橋、阿部職員参加 小林部長、阿部職員、韓国の「橋南所望の家」、「恵星口話学校」訪問 曹洞宗ボランティア会とのフィリピンでの合同研修に松浦職員参加  11	1月 「昭和」から「平成」に改元 11月 国連総会で「児童の権利に関する条約」を採択 11月 フィリピン、マニラでアキノ政権下で7回目のクーデター未遂事件 11月 ベルリンの壁崩壊。東西冷戦終結へ
1990年	1月 第3代法人理事長に深町正信就任 3月 7月 9月 CCWA 15周年記念映画「隣りの仲間たち」を製作	セブでセンター長会議開催 ソルソゴン・センターへの資金協力終結 タガイタイ、トンド、マリンドックのセンターに訪問旅行実施 カガヤンデオロで、これまでのワークキャンプを改め、ユースキャンプとして第1回を開催 [10] 北部ルソン島の地震被災者への緊急支援を実施 [11]	4月 ネパールで民主化運動。立憲君主制へ移行 7月 北部ルソン大地震発生 9月 国連で「子どもの

	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
	10月 CCWA 15周年記念の集いを東京にて開催。元里子のクラリンド・アガバイ(バギオ)、ニンファ・ドセナ(ボトラン)、ヘスス・マクタオ(セブ)とセンター長シンシア・バガ(イロイロ)が来日。15周年記念映画を上映。関西地方でCCWAの集いを開催 [12] 11月 15周年記念誌を発行 北部ルソン大地震への救援活動に対し、フィリピン社会福祉開発省、タペラ大臣より感謝状を受ける [13]  13 1991年 1月 東京弁護士会より第5回人権賞を受賞 [13] 2月 4月 九州地方でCCWAの集い開催 5月 北海道地方でCCWAの集い開催 6月 東京で東京弁護士会「人権賞」受賞記念の集いを開催。芳村真理さんをゲスト・スピーカーとして受賞の感謝と報告を行う 7月 8月 東京にてCCWAの集いを開催。センター長、エミー・ビエネス神父(オロキエタ)、センター職員フィロメナ・ウルバノ、里子の親を代表してレナルダ・カピリアンさん(ハニワイ)が来日。名古屋、金沢、伊奈、長野、新潟でCCWAの集い開催 10月 11月 12月 神奈川にてCCWAの集い開催	 12 イロイロ、バタンガス、ハニワイ、ホスピオのセンターへ訪問旅行実施 カガヤンデオロで第2回ユースキャンプを開催 フィリピン、ラモス大統領就任 5月 エチオピアの社会主義政権崩壊 6月12日 ピナトゥボ火山、20世紀最大の火山噴火 7月 エチオピア暫定政府成立 9月 フィリピン上院、アメリカとの基地協定延長を否決 ピナトゥボ火山噴火被災者への緊急援助開始 [14] カガヤンデオロで第3回ユースキャンプを開催 深町理事長、タペラ、カガヤンデオロのセンターを訪問 [14] バングラデッシュのサイクロン被災者に対し、「シャプラニール=市民による海外協力の会」を通して緊急援助金を支援 バギオ、アラミノスのセンターへ訪問旅行実施  14	
1992年	7月 エチオピアの首都アジスアベバにて、郵政省国際ボランティア貯金配分金の支援で「ストリート・チルドレン支援事業」を開始 [15] 8月 東京でCCWAの集い開催。センター長のレオニーナ・ドゥエニヤス(バタンガス)、アドラシオン・パスケス(マスバテ)が来日。関東周辺と北海道でCCWAの集いを開催 「CCWA子どもと地球を守る基金」を設立し、募金を開始 11月 CCWA沖縄の集いを那覇市で開催 韓国児童財団との協力で、韓国の福祉施設に働くソーシャルワーカー4名を日本へ招聘し「第1回社会福祉研修」を行った 12月	エチオピアの首都アジスアベバにて、郵政省国際ボランティア貯金配分金の支援で「ストリート・チルドレン支援事業」を開始 [15] ジョージ・ギッシュ理事、古財成成監事がトンド、バタンガスのセンターを訪問  15 フィリピンからアメリカの基地が全面的に撤去される	
1993年	2月 センター訪問旅行で、セブ、ナガ、リボンのセンターを訪問 オロキエタで第13回ワークキャンプを開催 3月 CCWA盛岡の集いを開催 4月 福岡、佐賀、長崎、大分でCCWAの集いを開催 5月 CCWA北陸の集いを高岡市で開催 6月 「CCWA子どもと地球を守る基金」のテレホンカード、ポストカードによる募金を開始 7月 8月 フィリピン活動報告会を東京、四国、関西地域で開催。センター長のエストレリャ・アルコンガ(アラミノス)とソーシャルワーカーのノニータ・リカルデ(イリガン)が来日。CCWA紹介ビデオ「もうひとつの喜びを」を作成 9月 CCWA岩見沢の集い開催 10月 「るつ記記念基金」奨学生、エドワルド・ソラとロナルド・マナロが、基金の招聘を受け来日、CCWA事務所を訪問 11月 CCWA熊本集い開催 12月	ピナトゥボ山噴火に伴う土石流被害に対し、支援活動を継続 フィリピン事務所長のレイナルド・マンテとロリータ・アントニオ職員がCCFインドネシアからの招請で現地を訪問 支援調査のため、阿部職員がネパール訪問 マニラでセンター長会議を開催 神戸聖愛教会「善隣幼児教育基金」の支援で、フィリピンの幼児教育マニュアルを作成 2つの大型台風で、ナガ、マリンドック、リボン、インファンタのセンター地域に大きな被害。緊急支援を実施 フィリピン事務所のジョセフィン・メシーナ職員が、	

	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
1994年 2月	韓国の福祉施設に働くソーシャルワーカー4名を日本へ招聘し「第2回社会福祉研修」を実施 	マルタ共和国で開催された「国際家族年」の国際フォーラムに参加 センター訪問旅行で、タガイタイ、カガヤンデオロ、イリガンのセンターを訪問/オロキエタで第14回ワークキャンプ実施/セブ、イロイロ、タナワン、ハニワイのセンターが共同で「CCWA子どもエコロジー・キャンプ」を実施	4月 日本、「児童の権利に関する条約」を批准
4月			
6月			
7月	CCWA福山友の会が発足		
8月	フィリピン活動報告会を東京、大阪、仙台、神奈川、北海道で開催。バギオのセンター長代理、エレナ・ロメロと元里子のアナ・リサ・グラニルが来日		
9月	「CCWA子どもと地球を守る基金」発起人会を開催		
10月	JICA/JANIC共催の「国際協力フェスティバル」に参加		
11月	韓国の福祉施設に働くソーシャルワーカー3名を日本へ招聘し「第3回社会福祉研修」を実施	イロイロ市でセンター長会議を開催 	
12月	チャリティー映画会で「フリーウィー」上映(東京、横浜、川崎)		
1995年 1月			阪神・淡路大震災。ローマ法王パウロ2世、マニラを訪問
2月			
4月	「CCWA地球と子どもを守る基金」実行委員会開催	オロキエタで第15回ワークキャンプ実施 センター訪問旅行で、バギオ、トンドのセンターを訪問。バギオでは、地域の自立を祝い感謝する感謝祭「カンニャオ」を開催/ネパール、オカルドンガ郡で、「水と健康プロジェクト」を支援 アグネス・V・ガトバタン、フィリピン事務所所長代理に就任	3月 地下鉄サリン事件
6月	6月から12月にかけて各地で活動報告会実施。東京、平塚、浦和、札幌、福山、松山、宇治、原町など		
9月	NHK第2ラジオ「福祉の時間」で小林部長が講師として出演		
10月	事務所内業務のコンピューターによるシステム化を段階的に開始		
11月		台風「マメン」「ペバン」「ロシン」により、モロン、ナガ、ハニワイ、ホスピシオ、リボン、インファンタ、マスバテ、ホセ・パガニンのセンターで大きな被害。被災者に緊急救援を実施	
1996年 1月		バラワン島、アポーランでセンター長会議を開催	2月 ネパールでマオイストがゲリラ活動開始
3月	国際精神里親運動部事務所落成式 	富士ゼロックス先端倶楽部のメンバーが、ボトランのピナツボ被災者の再定住地で植林活動のワークキャンプ実施	
6月		ネパール、オカルドンガ保健プロジェクトを開始 	
7月		ネパール女性開発計画を支援	
9月	東京、北海道、関西、四国、九州地域でCCWAの集いを開催。センター長のシスター・エベリンダ・ラカニラオ(ボトラン)とシスター・セシリア・パヨナ(ネグロス)が来日		
10月	「CCWA愛媛の会」発足		
1997年 1月		ダバオ市でセンター長会議を開催 アラミノスで第16回ワークキャンプを開催 フィリピン事務所長にレヒナ・M・ムンサヤク就任	この年、アジア通貨危機が発生。経済停滞により貧困層の数増加
2月	里子への特別送金を廃止		
9月	東京、中国、四国、関西地方、札幌でCCWAの集いを開催。センター長、シスター・アンヘレス・マルティン(ナガ)が来日		
1998年 1月		タガイタイでセンター長会議を開催 アラミノスで第17回ワークキャンプを開催 エチオピア・ストリートチルドレン事業終結 ミンダナオ島、ジェネラルサントス市で小規模ビジネス普及事業開始 センター訪問旅行で、ダバオ、ジェネラルサントス、ダスマニアスのセンターを訪問 ミンダナオ島、キダバワンで干ばつ被災者への緊急救援実施	
2月			
6月			
8月			
11月			
1999年 1月		イロイロ市でセンター長会議を開催 アラミノスで第18回ワークキャンプを開催	9月 台湾大地震
2月			
9月	東京、中国、四国地方、関西、北海道でCCWAの集いを開催。センター長、リー・ビネダ(ギマラス)が来日。東京事務所を会場にオープンハウス実施		
10月	アメリカン・エクスプレスカードによる会費の決済を開始	台湾大地震被災者への緊急支援を実施 在マニラ日本大使館の草の根無償資金援助からの助成で、プ	
11月			

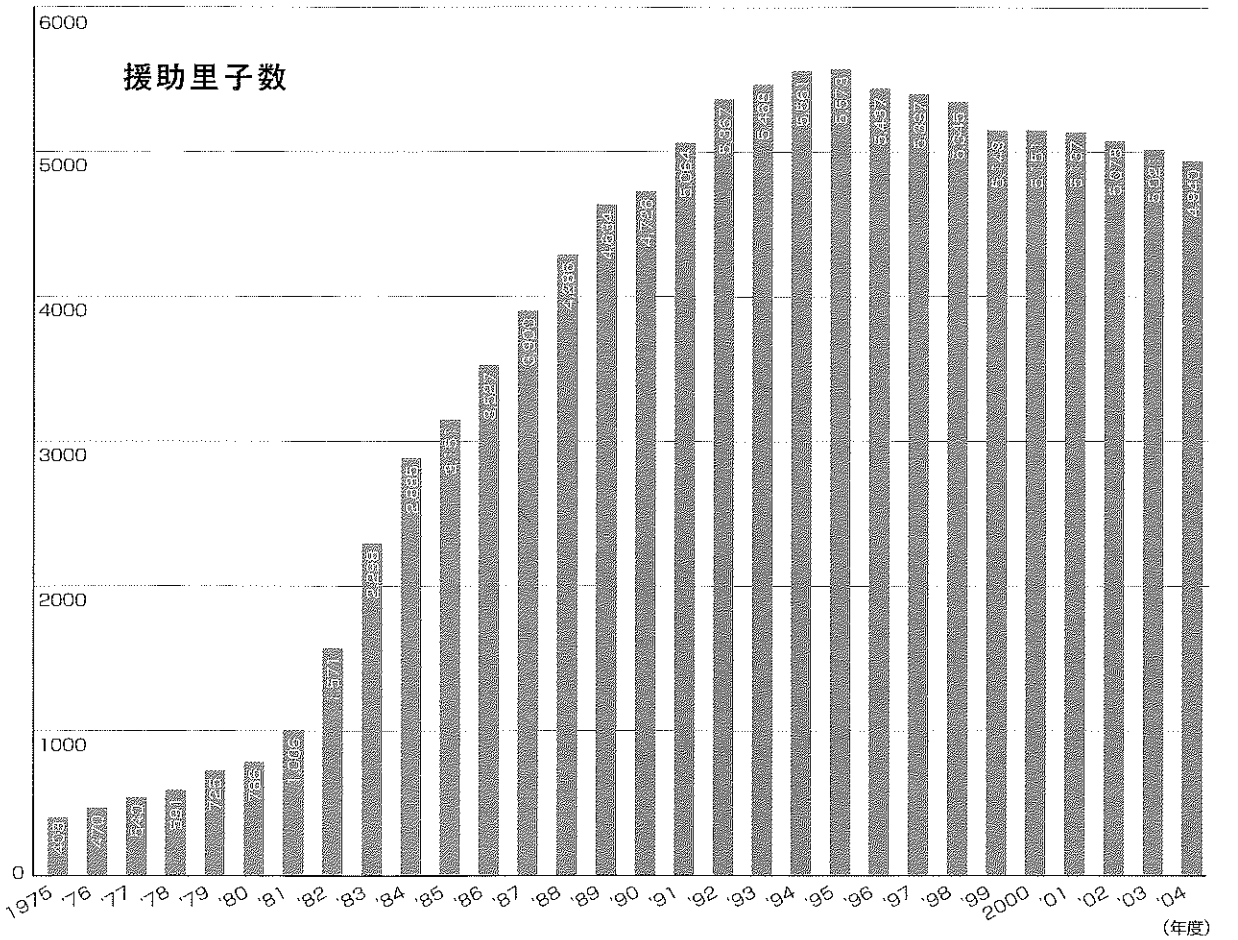
	日本国内の出来事	海外の出来事	一般事項
2000年 1月	CCWAのホームページ開設 	プロジェクト・データベース構築のためのコンピューター購入 各地のセンターが支援した住民組織による全国会議を開催	4月 ミンダナオ島でモスラム武装勢力とフィリピン国軍の間の武力衝突発生。エストラダ大統領、全面戦争を宣言
4月			
6月		ミンダナオ島キダバワンで、武力紛争により被災した人々への緊急支援を実施 	
7月		ネパール、栄養改善事業開始	
9月	CCWA25周年記念の集いを東京にて開催 25周年記念映画「あの日あなたが蒔いた幸せの種」の全国上映会を実施。12月までの約3ヶ月間に全部道府県を巡る		
10月		フィリピン事務所長、レヒナ・ムンサヤクがアメリカ、リッチモンドで開催されたCCFによる開発マネジメント研修に参加 プロジェクト・データベースシステムの「IMOS」に、各センターがデータ入力を開始	
11月			
2001年 1月			1月 エドサ第二革命でエストラダ大統領失脚。アロヨ副大統領が大統領に就任
2月		センター訪問旅行でバレー、ダスマニアスのセンターとタガイタイの協同組合を訪問	
4月	事務所内のコンピューターがLANでつながり、統一的な運用を開始	すべてのセンターから里子の代表2名ずつが参加して、マニラでCCWA「子ども会議」を実施 	
5月	フィリピン事務所スタッフが来日して「子ども会議」の報告会を東京で実施		
6月	キョーマン(株)、アサヒビール(株)と共催で、ワールド・カルチャー・キャラバン(料理イベント)を実施		6月 ネパール、ビレンドラ国王殺害事件
8月		ミンダナオ島キダバワンで、2000年の武力紛争により家を失った住民に復興支援を実施	
9月			
10月		フィリピン、シキホール島で召天された河野愛(めぐみ)さんを記念した、「めぐみ記念基金」を設置/ネグロス島、アティランのセンターの保健センター建設のため、在マニラ日本大使館より草の根無償資金の助成を受ける。同時多発テロに関連してCCFアメリカとベジャワール会へ緊急支援金を送る	アメリカで9.11同時多発テロ事件発生 10月 米、アフガニスタン爆撃開始
11月	CCWAホームページを大幅に改訂		
2002年 1月		ジェネラルサントス市でセンター長会議を開催 「めぐみ記念基金」の第1回奨学生に、ミンダナオ島チボリ町のドビー・バンシル	サッカー・ワールドカップを日韓共同開催
5月			
2003年 1月		ナガ市でセンター長会議を開催	エチオピア干ばつ深刻化
3月			3月 米英、イラク侵襲開始
6月		エチオピア干ばつで、5歳未満児への緊急食糧援助を実施 	フィリピンの対外債務574億ドルに拡大
8月	(株)ジャパン・エナジーと共催で、エチオピア支援の古本市を開催		
9月	東北、北陸、関東、関西、九州でCCWAの集いを開催。フィリピン事務所スタッフ3名が来日して報告。東京事務所「ナリオ・フィエスタ」開催		
2004年 1月		バコロド市でセンター長会議開催	1月 自衛隊イラク派遣開始
5月			5月 大統領選挙でアロヨ大統領当選
8月	キーコービー(株)、キョーマン(株)、(株)ジャパン・エナジーとの共催、エチオピア大使館後援で、エチオピア支援報告会を兼ねた古本市、料理教室を開催		7月 イラクでのフィリピン人労働者人質事件で、フィリピン国軍がイラクから撤退
10月	外務省、JANIC共催の「国際協力フェスティバル」に参加		12月 スマトラ島沖地震で、津波による被害が拡大
12月		台風「ウィニー」により、レアル、サンルイスのセンターで大きな被害。被災者に緊急救援を実施	
2005年 1月		タガイタイでセンター長会議開催	
3月	国際精神里親運動部30周年記念集会を開催 国際精神里親運動部は、基督教児童福祉会より独立し、特定非営利活動法人「チャイルド・ファンド・ジャパン」として新たな一歩を開始する		

数字で見るCCWA国際精神里親運動部の30年

	援助里子数	里親会費収入 (単位は千円)	協力会費 (単位は千円)	里子援助金送金額 (単位は千円)	協力会費送金額 (単位は千円)	支援センター数	新規里親会員	継続里親会員(※)
1975年度	403	13,766	2,664	9,720	300	3	151	46
1976年度	470	24,000	1,500	16,200	1,000	3	61	22
1977年度	540	24,960	2,000	16,868	1,500	3	68	20
1978年度	591	27,360	2,300	18,468	1,800	3	87	23
1979年度	725	31,000	5,500	21,400	4,000	4	121	35
1980年度	786	36,000	5,060	25,600	2,000	4	69	19
1981年度	1,006	44,391	8,092	29,347	2,598	6	254	55
1982年度	1,571	68,780	9,231	44,353	3,197	8	546	129
1983年度	2,298	96,248	15,503	67,755	3,175	12	786	214
1984年度	2,885	128,730	19,873	100,713	4,912	16	674	188
1985年度	3,151	144,420	21,223	107,205	3,230	16	395	110
1986年度	3,527	162,220	20,241	118,379	4,905	17	540	152
1987年度	3,900	180,500	16,529	107,315	5,810	17	461	151
1988年度	4,286	202,688	17,208	87,742	6,756	20	649	208
1989年度	4,634	212,444	16,377	113,522	10,931	22	423	136
1990年度	4,726	219,740	23,671	115,712	8,699	22	394	140
1991年度	5,064	241,089	34,726	142,495	12,481	23	449	180
1992年度	5,367	246,515	21,839	148,300	29,518	24	454	130
1993年度	5,468	256,057	19,032	137,945	7,795	24	436	168
1994年度	5,561	262,404	21,667	149,879	12,879	27	331	132
1995年度	5,573	253,028	28,914	155,514	22,357	33	321	172
1996年度	5,437	255,830	35,410	155,520	28,306	37	326	179
1997年度	5,397	260,466	46,775	155,476	29,705	38	309	185
1998年度	5,345	253,526	52,974	155,087	31,814	38	297	192
1999年度	5,149	246,367	52,281	146,949	30,169	36	218	144
2000年度	5,151	240,006	36,361	144,000	25,363	31	279	204
2001年度	5,137	243,084	49,054	146,000	38,833	30	252	201
2002年度	5,078	243,102	35,326	148,512	22,374	31	283	234
2003年度	5,021	240,256	43,877	144,000	33,719	28	227	221
2004年度	4,940	196,966	32,953	120,000	18,650	26	150	149

(※) 各年度に新規会員となられた後、2005年1月現在も会員でいらっしゃる方の数

*2004年度は2005年1月31日現在



- 1) 表の継続里親会員数から分かるように、「精神里親会員の方々の継続率が非常に高い」ということは、安定して国際精神里親運動をおこなうことができている、ということを物語っています。
- 2) ネパールにおける支援事業をはじめた1995年度以降、ほぼ支援に必要な協力会費が確保されています。このことも「支援事業の安定した継続」に寄与しています。
- 3) 1991年度の協力会費の伸びは、ピナトゥボ山噴火による募金活動へのご支援によるものです。
- 4) 棒グラフ中の援助里子数の推移は、対応する里親会員数の推移も表していますが、このグラフから言えることは、
 - (ア) 1982年度から84年度にかけての会員の急速な伸びは、新聞、テレビなどでCCWAの活動が紹介されたことによるものです。
 - (イ) 80年代半ばから90年代前半の伸びは、NGO活動の広がりで一般の関心が高まったこと、また日本の経済の活況が原因と考えられます。
 - (ウ) 1995年の5,573人をピークに徐々に減少傾向となっていますが、これは長期の不況に向かう日本経済の動向が反映されたものと考えられます。

こうして30年間継続して支援活動をしてこられたのも、これらの数字からわかるように、のべ10,000人を超える精神里親会員の方々と協力会員の方々のご支援にほかならないと感謝しております。

精神里親運動による協力センター一覧

センター番号	センター名	センター所在地	支援開始日	支援終了日	支援里子延数
1	マリー・ユージニー・コミュニティー・センター Marie Eugenie Community Center	バギオ市、ベンゲット州 Baguio City	1975.04.01	1995.05.31	512
2	サンタ・モニカ・ソーシャル・アクション・デベロップメント・センター Sta. Monica Social Action & Development Center	ボトラン、サンバレス州 Botolan, Zambales	1975.04.01	1999.05.31	1,095
3	シーアイシー・サンタ・ルイサ・デベロップメント・センター CIC Sta. Luisa Development Center	セブ市、セブ州 Cebu City	1975.06.01	1996.05.31	763
4	アサンプション・ソシオ・エデュケーション・センター Assumption Socio-Educational Center	イロイロ市、イロイロ州 Iloilo City	1979.04.01	1998.05.31	989
5	ビラ・サンタ・ルイサ・デ・マリラック・センター Villa Sta. Luisa de Marillac Center	タガイトイ市、カピテ州 Tagaytay City	1981.10.01	1996.05.31	401
6	マザー・キャサリン・マッコレーイ・ファミリー・センター Mother Catharin McAuley Family Center	タナワン、レイテ州 Tanauan, Leyte	1982.03.01	1999.05.31	521
7	デ・ポール・ファミリー・サービス・センター De Paul Family Service Center	トンド地区、マニラ市 Tondo, Manila	1982.11.01	1997.05.31	511
8	ソルソゴン・ファミリー・サービス・センター Sorsogon Family Service Center	ソルソゴン、ソルソゴン州 Sorsogon, Sorsogon	1982.10.01	1989.11.30	400
9	リングアップ・カプワ・デベロップメント・センター Lingap Kapwa Development Center	モロン、バタアン州 Morong, Bataan	1983.05.01	1998.05.31	454
10	サンタ・ラファエラ・マリア・ファミリー・サービス・センター Santa Rafaela Maria Family Service Center	ナガ市、南カマリネス州 Naga City	1983.08.01	継続中	1,087
11	マリンドゥケ・ファミリー・サービス・センター Marinduque Family Service Center	ボアック、マリンドゥケ州 Boac, Marinduque	1983.12.01	2002.05.31	569
12	セント・フランシス・センター・インテグレイテッド・フォー・オーロラ・インコーポレイテッド St. Francis Center Integrated Area Dev't for Aurora Inc.	バレール、オーロラ州 Baler, Aurora	1984.02.01	2001.05.31	745
13	ロボ・コミュニティー・デベロップメント・センター Lobo Community Development Center	ロボ、バタンガス州 Lobo, Batangas	1984.06.01	1999.05.31	586
14	ハニワイ・カルバリオ・コミュニティー・センター Janiway Calvario Community Center	ハニワイ、イロイロ州 Janiway, Iloilo	1984.08.01	1999.05.31	542
15	ホスピシオ・ファミリー・サービス・センター Hospicio Family Service Center	マニラ市 Manila	1984.10.01	1998.05.31	392
16	サンタ・ルイサ・デ・マリラック・センター Sta. Luisa de Marillac Center	リボン、アルバイ州 Libon, Albay	1985.01.01	1997.05.31	412
17	カノッサ・ファミリー・サービス・センター Canossa Family Service Center	カガヤンデオロ市、東ミサミス州 Cagayan de Oro City	1986.12.01	1998.05.31	555
18	ホーリー・ロザリー・ベーシック・エクレスリアル・コミュニティー・センター Holy Rosary Basic Ecclesial Community Center	オロキエタ市、西ミサミス州 Oroquieta City	1988.04.01	1999.05.31	421
19	インファンタ・コミュニティー・デベロップメント・センター Infanta Community Development Center	インファンタ、ケソン州 Infanta, Quezon	1988.09.01	継続中	767
20	ランボ・センター LAMBO Center	ニュー・バタアン、コンポステラ・バレー州 New Bataan, Compostela Valley	1988.11.01	2002.05.31	477
21	ブカス・パラッド・コミュニティー・センター Bukas Palad Community Center	アラミノス、パンガシナン州 Alaminos, Pangasinan	1989.08.01	継続中	822
22	バード・オー・センター BIRD-O Center	サンバスクアル、マスバテ州 San Pasucual, Masbate	1989.11.01	2000.05.31	244
23	ウスワグ・イリガン・コミュニティー・センター Uswag Iligan Community Center	イリガン市、北ラナオ州 Iligan City	1990.11.01	2004.05.31	317
24	マザー・リタ・バルセロ・コミュニティー・センター Mother Rita Barcelo Community Center	バゴ市、西ネグロス州 Bago City	1991.12.01	継続中	473
25	トライバル・フィリピン・アポストレート・パラワン・センター Tribal Filipino Apostolate Palawan Center	アボラン、パラワン州 Aborlan, Palawan	1992.12.01	2003.05.31	272

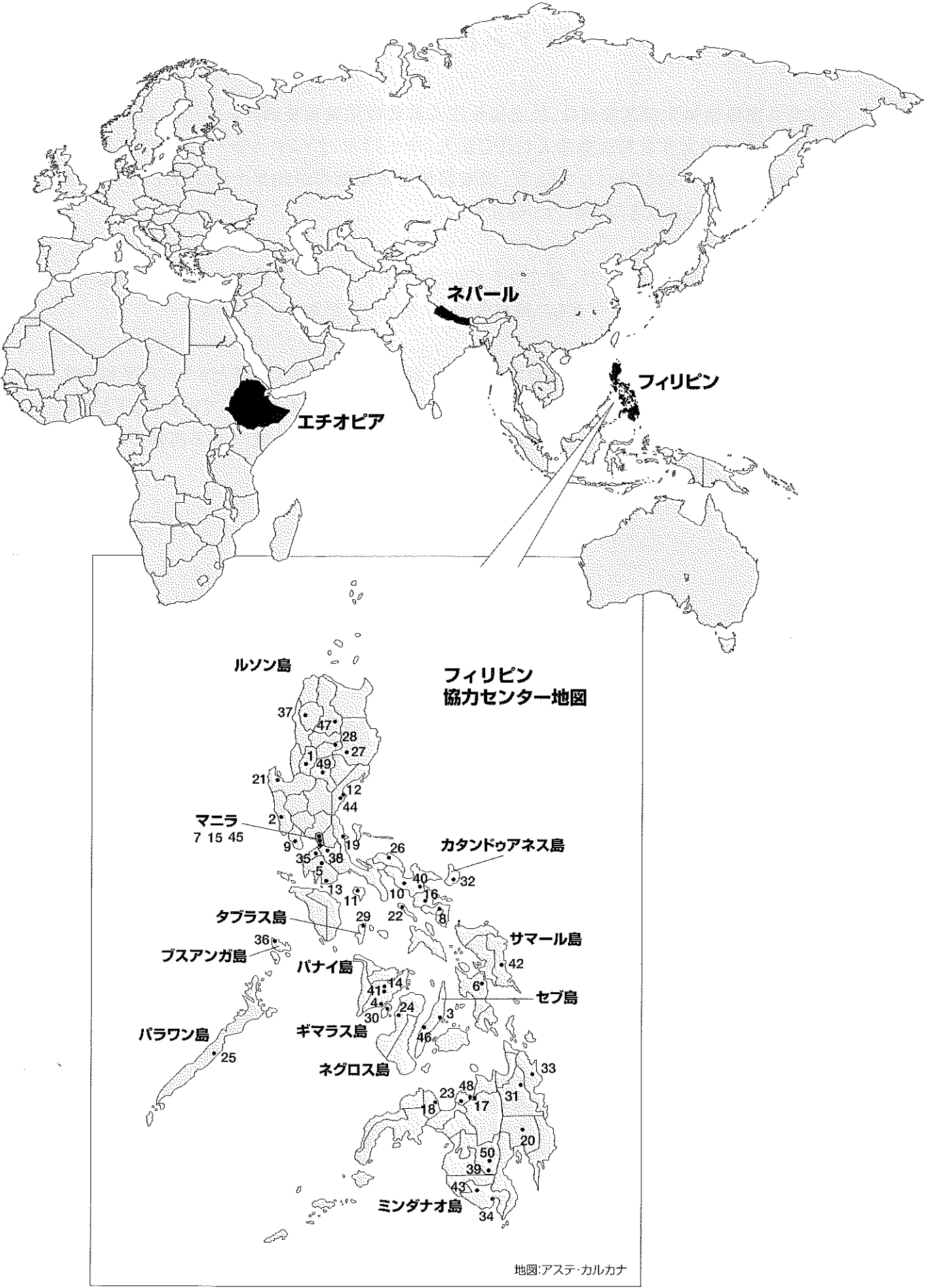
延べ里子数は2005年2月8日現在

センター番号	センター名	センター所在地	支援開始日	支援終了日	支援里子延数
26	イナ・ナン・ブハイ・コミュニティー・センター Ina ng Buhay Community Center	ホセバガニバン、北カマリネス州 Jose Panganiban, Camarines Norte	1992.12.01	継続中	376
27	パヌルヤン・センター Panuluyan Center	サンチャゴ市、イサベラ州 Santiago City	1995.02.01	継続中	499
28	カタグワン・センター Kataguan Center	ラガウェ、イフガオ州 Lagawe Ifugao	1995.02.01	継続中	279
29	セント・ミカエル・パリス・コミュニティー・サービス・センター St. Michael Parish Community Service Center	カラトラバ、ロンブロン州 Calatrava, Romblon	1995.09.01	2002.05.31	307
30	コミュニティー・パートナーシップ・フォー・インテグレイテッド・チャイルド・デベロップメント・センター Community Partnership for Integrated Child Development Center	ブエナビスタ、ギマラス州 Buena Vista, Guimaras	1996.01.03	継続中	521
31	フランシスカン・コミュニティー・センター Franciscan Community Center	プロスペリダッド、南アグサン州 Prosperidad, Agusan del Sur	1996.01.03	2003.5.31	256
32	アシジの聖フランシスコ・センター St. Francis of Assisi Center	ビラック、カタンドゥアネス州 Virac, Catanduanes	1996.02.01	継続中	453
33	スピード・フォー・スリガオ・センター SPEED for Surigao Center	サンミゲル、南スリガオ州 San Miguel, Surigao del Sur	1996.03.18	継続中	588
34	NDBRCFI・ラネスティン・デベロップメント・センター NDBRCFI LANESTIN Development Center	ジェネラルサントス市、南コタバト州 General Santos City	1996.03.18	継続中	558
35	セクレッド・ハート・オブ・ジーザス・ファミリー・センター Sacred Heart of Jesus Family Center	ダスマリニャス、カピテ州 Dasmariñas, Cavite	1996.08.01	継続中	560
36	ビショップ・グレゴリオ・エスピガ・センター Bishop Gregorio Espiga Center	ブスアンガ、パラワン州 Busuanga, Palawan	1996.08.01	2004.05.31	151
37	サン・イシドロ・ウビン・センター San Isidro Ubina Center	サンイシドロ、アブラ州 San Isidro, Abra	1996.11.15	2003.05.31	235
38	カイバグシク・コミュニティー・センター Kaybagsik Community Center	アンティポロ市、リサール州 Antipolo City	1996.11.15	2002.5.31	188
39	トゥルナン・ゾーン・オブ・ピース・センター Tulunán Zone of Peace Center	トゥルナン、北コタバト州 Tulunán, North Cotabato	1997.02.15	継続中	148
40	パトン・トライバル・コミュニティー・センター Patong Tribal Community Development Center	イリガ市、南カマリネス州 Iligan City	1997.11.01	継続中	179
41	インマヌエル・ルーラル・デベロップメント・センター Immanuel Rural Development Center	カバトゥアン、イロイロ州 Cabatuan, Iloilo	1998.11.01	継続中	416
42	マザー・イグナシア・ナショナル・ソーシャル・アクション・センター Mother Ignacia National Social Action Center	ボロンガン、東サマル州 Borongan, Eastern Samar	1999.01.01	継続中	176
43	センター・フォー・コミュニティー・ヘルプ・インテグレイテッド・ライフロング・デベロップメント Center for Community Help Integrated Lifelong Development	コロナダル、南コタバト州 Koronadal, South Cotabato	1999.08.01	継続中	225
44	セント・フランシス・センター・インテグレイテッド・フォー・オーロラ Saint Francis Center-Integrated Area Development for Aurora	サンルイス、オーロラ州 San Luis, Aurora	2001.08.01	継続中	292
45	オールド・サンタ・メサ・センター Old Sta. Mesa Center	オールドサンタメサ、マニラ市 Old Sta. Mesa, Manila	2001.11.15	継続中	231
46	アウ・レイディ・オブ・ナザレス・チルドレン・センター Our Lady of Nazareth Children Center	バリリ、セブ州 Bariil, Cebu	2002.05.15	継続中	153
47	タブク・ルミン・アワン・センター TABUK LUMIN-AWA-AN Center	タブク、カリガ州 Tabuk, Kalinga	2003.01.01	継続中	102
48	ペドロ・カルソン・ピース・センター Pedro Calungsod P.E.A.C.E. Center	カガヤンデオロ市、東ミサミス州 Cagayan de Oro City	2003.01.01	継続中	154
49	アルダースゲート・クリスチャン・チャイルド・センター Aldersgate Christian Child Center	ソラーノ、ヌエバ・ビズカヤ州 Solano, Nueva Vizcaya	2003.06.01	継続中	100
50	チルドレンズ・エデュケーション・アンド・ウェルフェア・アシスタンス Children's Education and Welfare Assistance	キダパワン市、北コタバト州 Kidapawan City	2004.06.01	継続中	100

短期開発プロジェクト一覧

支援年	対象地域	支援対象施設・実施団体	支援概要	助成金団体
1976	大韓民国、釜山市	児童病院、6施設		
1976・1978	タイ国、バンコク市	プラティープ スクサ学校	寄宿学校運営援助	
1977～1983	大韓民国、釜山市	恵星口話学校	保育園、中等教育、補聴器購入	
1980～1982	フィリピン、サンボアンガ		児童給食プログラム	
1982～1984	フィリピン、バターン	インドシナ難民センター	幼児給食プログラム	
1983～1990	大韓民国、ソウル市	橋南所望の家	施設整備、聴能言語士人件費	
1984～1985	フィリピン、北スリガオ州		児童給食プログラム	
1984～1987.10	フィリピン、マニラ	ハンセン病療養所	給食プログラム	
1985.2	エチオピア	CCF	飢餓救援	
1985.9～1990	フィリピン、西ネグロス州、ラ・カルロータ	カバラカ財団	給食、収入向上、地域開発	
1986.11	フィリピン、イロイロ州、サグラド	愛徳姉妹会	保育プログラム	
1986.12～1987.11	フィリピン、カミギン州、マヒノグ		給食プログラム	
1987.8～1988.7	フィリピン、セブ州、マンダウエ	星野邦夫医師	小児結核予防プログラム	
1987～1990	フィリピン、アルバイ州、ダラガ	ピコール大学	幼児援助プログラム	
1987.4～1989	フィリピン、バコロド市、カメロリ	フィリピン・オーガスティン修道会	給食プログラム	
1988.5～1990	フィリピン、イリガン市	マリアの宣教師フランシスコ修道会	給食、幼児教育、収入向上	
1988.7～1989	フィリピン、バラワン州、カラウイト	ブスアンガ・カトリック教会	保育プログラム	
1990・1995	フィリピン、バギオ市、カゲトゥアン市、ヌエバビスカヤ州	CCWAマニラ事務所	バギオ大地震被災者への緊急援助	
1990	タイ国、バンコク市	曹洞宗国際ボランティア会	保育園火災への見舞金	
1991.7～1992	フィリピン、サンパレス州	CCWA協力センター②/サンパレス社会行動センター	ピナツポ火山噴火による被災者への緊急援助	立正佼成会、平和基金
1991	タイ国、プラチンブリ県、クロン・ナム・サイ	タイCCF	井戸掘り支援	
1991	バングラデッシュ、東南部	シャブナール＝市民による海外協力の会	サイクロン被災者への緊急援助	
1992～1995	フィリピン、サンパレス州、パンバンガ州	サンパレス社会行動センター、アジア社会研究所 (ASI)	ピナツポ火山噴火による土石流被災者への緊急援助	
1992	フィリピン、オロキエタ市	CCWA協力センター ⑬	貯水槽建設	
1992～1998.5	エチオピア、アジスアベバ市	エチオピアCCF	ストリートチルドレンへの教育、自立支援	郵政省国際ボランティア資金配分金
1993～2000.5	フィリピン、ヌエバビスカヤ州、アリタオ	TRICORD	少数民族の幼児教育、協同組合支援	
1993	フィリピン、マサバテ州、サンバスクアル	CCWA協力センター ②	地域活動と患者搬送用のエンジン付きボート購入	地球市民財団
1993	フィリピン、マニラ	CCWAマニラ事務所	幼児教育マニュアル作成	神戸聖愛教会、善隣基金
1994～1995	フィリピン、マリンドック州、ボアック	CCWA協力センター ⑪	小児結核対策プロジェクト	
1995.1～1996.12	フィリピン、ジェネラルサントス市	ノートルダム・ビジネス・リソース・センター	少数民族の幼児教育、医療、生計向上支援	
1995	フィリピン	CCWA協力センター・ASI、アサンタースクール、リマナン開発財団	台風被災者救援	
1995	フィリピン、カガヤンデオロ市	CCWA協力センター ⑪	スラム地域のトイレ建設	コープさっぽろ
1995	ネパール、オカルドゥンガ郡	ネパール合同ミッション (UMN)	水と子どもの健康プロジェクト	
1995.3～1998.5	フィリピン、南カマリネス州、リブマナン	リブマナン開発財団	ハンセン病完治者の社会参加支援	
1996	フィリピン、マサバテ州、サンバスクアル	CCWA協力センター ②	コミュニティ・トイレの建設	コープさっぽろ
1996.7～1998.5	フィリピン、ケソン市	Social Development Index	幼児教育活動支援	
1997.1～1997.12	フィリピン、ヌエバビスカヤ州、アリタオ	TRICORD	少数民族のための保育所建設	東京新橋ライオンズクラブ
1996	ネパール	地方開発省、女性開発課	住民組織支援強化	
1997.6～2000.5	フィリピン、サンボアンガ市、ブンギアオ	クラレチアン宣教会	住民組織強化と収入向上	
1996.7～現在	ネパール、オカルドゥンガ郡	ネパール合同ミッション (UMN)	病院支援と地域保健活動支援	
1998.6～現在	フィリピン、ジェネラルサントス市	ノートルダム・ビジネス・リソース・センター	小規模ビジネス普及事業	
1998	フィリピン、北コタバト州、トゥルナン	カトリック・キタバワン教区	干ばつ被災者への緊急食糧援助	
1998	フィリピン、ギマラス州、プエナビスタ	CCWA協力センター ⑩	保育所建設	
1999	台湾、台中県	台湾CCF、弘道老人福利基金会	台湾大地震被災者への緊急救援	
2000.6～2001.8	フィリピン、北コタバト州	カトリック・キタバワン教区	武力紛争避難民への緊急支援	
2000.7～現在	ネパール	ネパール合同ミッション (UMN)	栄養改善事業	
2001.11	アメリカ	CCF	9.11同時多発テロ後の子どものストレス対応マニュアル作成	
2001.11	アフガニスタン	ベシャワール会	カブール飢饉対策計画	
2003.6～現在	フィリピン、バラワン州、ブルックスポイント	フィリピン・オーガスティン修道会	バラワン族生活改善支援	
2003.6～2003.12	エチオピア、東シオア地域	エチオピアCCF	栄養不良児への緊急食糧援助	
2003.8～2004.5	エチオピア、グラーク地域	エチオピアCCF	安全な水確保の支援	

地図

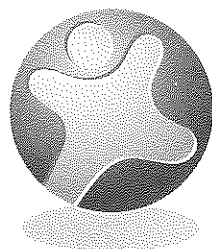


チャイルド・ファンド・ジャパンについて

CCWA国際精神里親運動部は、社会福祉法人基督教児童福祉会から独立し、2005年3月に設立される特定非営利活動法人（NPO法人）チャイルド・ファンド・ジャパンとして、これまでの活動を継続していくことになりました。国際精神里親運動部が30年かけて培ってきた経験をバネにして、さらに大きく跳躍していきます。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、全ての子どもたちが幸せに、そして健康な大人に成長してもらいたいと願いを込めて、「子どもの権利条約」に基づいて活動をしていきます。

チャイルド・ファンド・ジャパンを表すロゴマークは、地球に暮らす全ての子どもたちが平和な社会で元気に成長できることを願って、青い地球と元気な子どもをイメージしています。子どもの形は、また、チャイルド・ファンド・ジャパンがキリスト教をバックボーンとしている団体であることを示している十字架をシンボル化しています。



ChildFund
Japan

編集後記

CCWA国際精神里親運動部が設立されてから現在までの30年間でこれだけのページにまとめることは大変な作業でした。どの事柄にも、それに関連する出来事や人々が顔を見せます。すべてを盛り込みたいと願いながらも、それらを割愛していかざるを得なかったことを、どうかご理解ください。

それでも、数多くの会員の皆様をはじめとする関係の方々の熱い思いが行間に入められていること、そして何より30年間を通してアジアやアフリカの子どもたち、人々との間にかけがえのない見えない絆を培ってきたことの重みを感じていただけたらと存じます。これまでの多くの方々からのご支援を心に刻みながら、これからも新しい法人のもとで、さらに熱い思いをもって団体の歴史を刻んでいきたいと強く願っています。

編集委員代表：伊藤久平 松浦宏二

発行日 2005年3月17日

発行者 理事長 深町 正信

社会福祉法人

基督教児童福祉会 国際精神里親運動部

〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5

TEL.03(3399)8123 FAX.03(3399)0730

デザイン 株式会社モスデザイン研究所

印刷 株式会社ニシカワインフォメーションサービス



国際精神里親運動部

CCWAは2005年3月から
ChildFund Japanと法人名を変更しました

表紙の絵画はマニラにあるCCWA協力センターの
里子たちが、アートワークショッププログラムの
ひとつとして描きました。

Alexis Villarin
Cris Jane Umiten
Divine Cabardo
Jerome Marvin Lim
Jhunniore Regondique
Joan Calma
Joselito Oliver
Noel Adriatico
Marcelino Pacleb
Maricel Ramirez
Mark Anthony Mozo
Mary Ann Miralo
Mary Grace Calma
Reynald Martinez
Renz Dominique Recepcion
Ronaldo Concha
Roselle Bibero
Wadel Cabrera

“母と子” の絵画：©Wadel Cabrera II